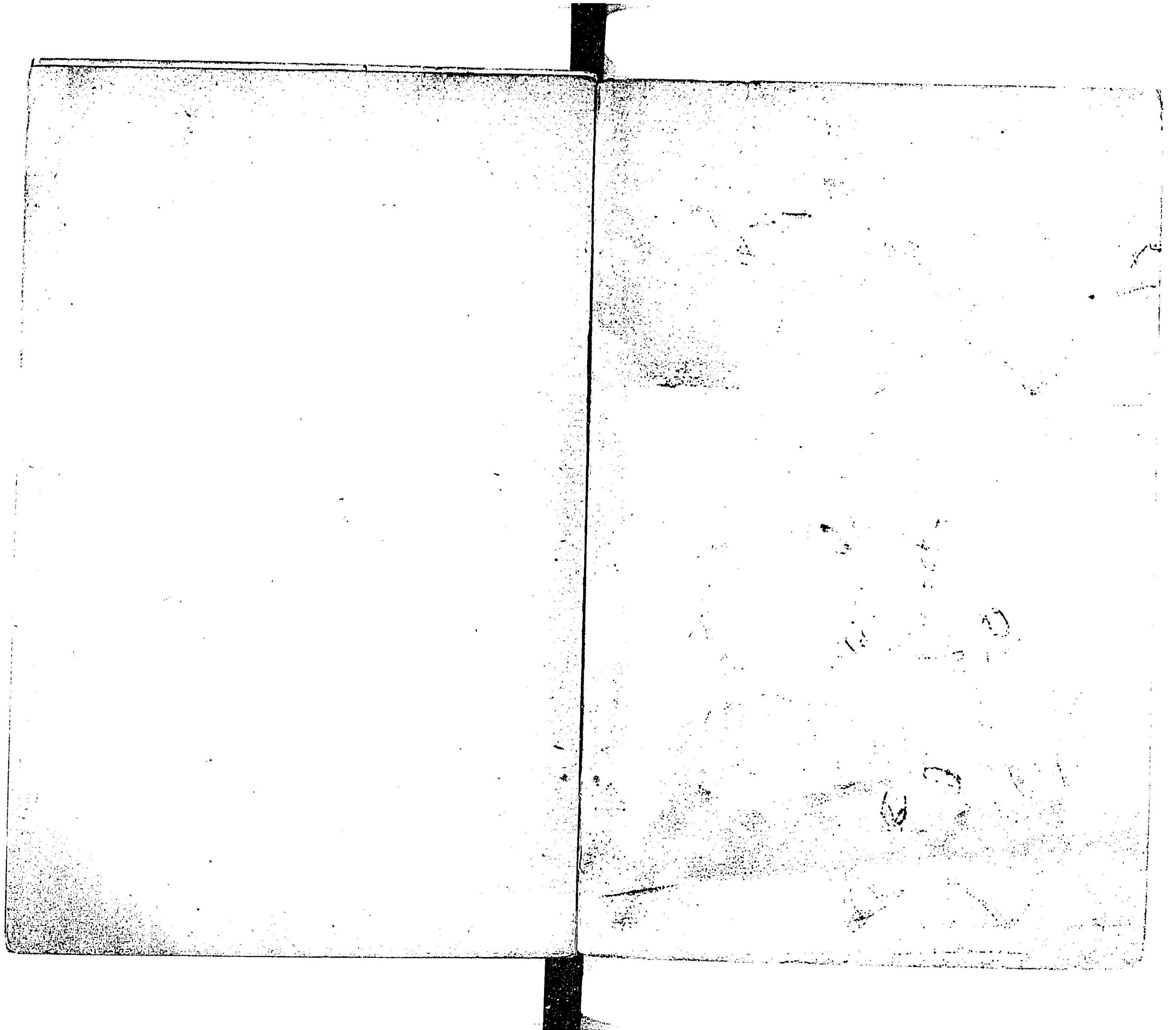


巴日ラカバ



259
1048



特13
735

島村抱月序

松田慧星著

學生生活
ハンカラ日記

節軒學人批評
小杉未醒書

明治
43. 3. 24
内交

學生生活バンカラ日記後編

慧 星 著

七月一日（月曜日）曇午後六時より少雨

福田君の
米搗きバ
ツタ。

福田判事君は随分滑稽を演ずる男だ。今日も修身の竹内先生が、急に教室に用事があったと見えて、僕と一緒に来て、外から入り口の扉を押されたけれども、何うしても開かぬ。今度は、僕が代りに押して見れば、漸と開いたはよけれど、内から、『ワッ』と叫んで驚かした者がある。誰かと思えば、奴だ。大將、内から扉を押してゐたものらしい。所が、意外にも、僕の後に竹内先生が立つてゐられるのに心附いて、喫驚し、『あっ。先生どすか。御免やす』と、狼狽の餘り、京都訛りをそのまま、頻りに米搗きバツタをさめ込んでゐる笑止さ。竹内先生も思はず、噴き出され

七月二日

七月二日

三三三

真に迫つて妙。

た。傳へく、これが大評判となり、頻りに仲間から揶揄はれてゐた。圖書の宇野先生は、檜垣先生に較ぶれば、頗る敏活だ。今日、三時間目の畫の時間に集めた、宿題「海」の答案を直ぐ點檢して、放課時間にはもう返された。僕の中には「真に迫つて妙」と、短評が書き添へてあつた。何にしても褒められるのは悪い氣持ちのせぬものだ。

學校の歸りに柔道に寄り、午後五時に歸宅。

○人を興がらせるには失敗談に如くはなし。十中八九の人は他の成功談を厭ひ惜み且つ兎へばなり。謙讓の人常に世の同情を得し、高慢の人常に人望を失ふ所以亦此の人情の弱點に基因するものと知るべし。

七月二日 (火曜日) 晴後曇

青年洋畫家安田君から、自筆の繪葉書を送られた。十二社の寫生らしい。下の方に俳句が書き添へてあつた。

水樓の酒旗新らしき茂りかな。

そこで、僕は、例の海の寫生畫を描き、駄句を添へて返禮した。

新緑滴る

真に迫つて妙ちきりんの夏の海。

○無邪氣なる雅趣却て大家の自慢較べに勝る數等。

七月三日 (水曜日) 西南の強風晴

咯血。

肺病の檜垣先生が大變危篤だといふ噂。昨夜咯血が甚しいのを、食鹽水で漸と止めたのだとか。もう長くはあるまい氣の毒なことだ。

又々騒ぎ立つ。

來週月曜から、いよいよ試験が始まるといふこと。今更のやうに、一同、又々騒ぎ立つ。

弔文の準備。

六年級の窪田君は、無遠慮な男だ。檜垣先生の葬儀の時に讀まねばならぬからといふので、弔文を草して、『添削して下さい』と、『今日、國語の小出先生の許に持つて往つて、叱られて來た。』

○主人公何故此の無禮漢を默許するや。

七月四日 (木曜日) 晴

福田判事君が、二時間目の休憩時間に眞面目になつて、『檜垣先生はま

福田君類死の恩師を侮辱す

七月四日

三三三

七月五日

二三四

姉さんの
悪癖。

だどすかいな』と聞く。『まだどすかつて何が？』と慌けて問ひ返へせば、『極楽地方に出向を命ずは』といふ。上方者は案外口が悪い。

蚊帳。

学校から歸れば、今日も、近田の姉さんが来て、母と何やら浸々話してゐた。又、冷遇とか虐待とか愚痴を浴してゐるのであらう。嫌になつて了ふ。蚊が出たので、今夜から蚊帳を吊す。蚊帳は陰氣なものだ。僕は、夏の氣候の開放主義な發展主義なところは四季の何時よりも好きであるが、蚊帳だけは閉口だ。

○福田の侮辱的冷罵に一の鐵拳を加ふるものなし。青年者流の感情は偏頗なる哉。

七月五日（金曜日）晴

蜘蛛の巣

今日、文部の〇〇視學官が巡視せられた。『便處の天井に蜘蛛の巣があつたのは不都合だ。清潔といふことは、学校の體面を保ち秩序を整へる上に必要なるのみでなく、生徒の訓練上、又、學校衛生上、極めて大切なことであるから、將來、よく注意せられたら』といふ、注意があつたさう

神經質。

だ。細事を忽にするのは悪いが、細事を慎むと同時に、大局を洞察するといふことも忘れてはならぬと思ふ。何うも、學者や教育家には、神經質の人が多し。

我が校長が、生徒一同を集めて、『斯う言つて叱られた』と、平氣で、自分から吹聴せられたのは、何時も乍ら、洒々落々たる所があつて面白い。

○都市の人は特に神經質に偏し易し。自ら大に修養する所なかるべからず。

七月六日（土曜日）曇夜少雨

眞面目な
研究所。

泥繩的勉強家が、昨今、頻りに學科の不審を質す。休憩時間の教室は眞面目な研究所のやうだ。平素、此の一割位の心掛けがあらばと思ふ。

○受働的勉強家の多い世の中。

七月七日（日曜日）雨

竹坊の且
那様。

前四時起床。冷水浴深呼吸二分間體操の後、例に依つて復習。食後、

七月七日

二三五

七月七日

二二六

竹坊を遊ばせる。竹坊は、近來、父のことを、旦那様といふ。下女の口上を見做つたものと見える。滑稽なものだ。

午前八時。宮川君來訪。試験の準備として、復習やら回答やらを遣つた。

午前十一時半。宮川君歸る。晝食後。今度は僕が宮川君を尋ねて往つて、又々、二時間程復習して、それから、例の室内遊戯で、大に運動をした。

午後五時歸宅。入浴、晩食の後、妹の英語を復習して遣り、後、福翁百話を讀んで、八時四十分には寐た。

○父は「アナタ」母は「オイ」姉は「花ちゃん」自分は「坊や」と心得てゐる幼児の無邪氣なる一學一動にも、家族の一言一行が如何に彼れを感化して其の將來の運命を定むる上に大勢力を有するものなるかといふことが知らる。幼兒は口で戯けることの出来ぬものなり。行つて示せよ。これ有力なる暗示なり。竹坊先生の記事に因み一言家庭の感化力に及ぶこと附り。

七月八日（月曜日）雨

修身、譯讀及び圖畫の試験があつた。餘りに平易で寧ろ滑稽だと思つてゐたれば、修身を一問題意を誤つたため、失策つた。

學校から歸りに、柔道に立ち寄り、四時歸宅。

先日來苦心中であつた、夏季休業中の旅行日程が出来たので、父に提出。旅費五拾圓請求した。「考へて置かう」との挨拶。

明日、幾何の試験があるので、今夜、念の爲め一回復習。夜八時半に寢た。

○一夜造りの利く學科は器械的暗記もの二三のみ。

七月九日（火曜日）雨

幾何満點

得意の小

幾何の答案は慥かに満點を占めた。其の他は記すに足らぬ。大得意で歸宅。妹に向つて迄、鼻息が荒い。「小人は、少し得意のことがあれば、すぐ高慢になるものだ」と、今日は浸々感じて、自分乍ら愛想が

七月九日

二二七

油断大敵

旅費五拾圓

七月十日

二三八

旅費認可

昨日父に請求して置いた旅費は、認可せられた。夏季休業中、僕が如何に活動するか、見物だ。

縛繩の吟味

今日は、非常に調子附いて来て、入浴の時間を迄惜んで、試験準備を行つた。平素行つた上で行ふのだから、これはどろ盗繩ではない泥棒を縛する前に、更に一應、繩の吟味をするので、少しも耻づることは無いと思ふ。

○盗を捕へて繩を作るは猶ほ且つ手を束れて呆然たるに僅れり。

七月十日 (水曜日) 雨

英語の試験

第一時の會話の時間に、和文英譯や英文和譯の簡易なものを書き取りてがあり、第二時、第三時にかけて、會話の口頭試験を遣られた。ブライアン先生の發音は案外不明瞭で、困らされた。"How is your health?" と問はれたのが、"Where is your house?" と聞え、トナンカンの答をして

大笑ひをせられたのは、滑稽であつた。土佐から来た、奇行家の阪本君は、會話が大の下手である。然るに、平氣で大手を振つて、ブライアン先生の前に出て、只、"yes"と"no"とを振り廻はし、好い加減に、"Thank you."とて引き揚げて来たといふこと。

第四時の代數五問中、最後の二問が少し怪しかつた。

何にでも極端主義の松山君は、日頃案外勉強しない代りに、昨夜は徹夜して、試験準備を行き、便處に入つて迄、幾多の定義表を繰つたと自白してゐた。

便所で幾何の復習

○會話は模倣に巧みな脳髓の幼稚な思考力に乏しい人間の方が上手の様だ。男子より女子が、大人よりは小供が、邦人よりは清人が、清人よりは韓人の方が巧いを見れば分る。

七月十一日 (木曜日) 雨

體操試験の際に思ひ出

今日は歴史と簿記と體操との試験があつた。體操の試験といへば、忘れもせぬ、本年三月の二十三日に、藤野君と二人、茫然として立つて傍

七月十一日

二二九

七月十二日

一三〇

二問か出
来まへん

観してゐたことを思ひ出し、相顧みて一笑した。

例の福田判事殿が「歴史は習はんのが出たさかい、二問か出来まへん。これぢやあさまへんわいな」と真面目になつて溢してゐたのは、氣の毒であつた。

柴田君は「相變らず手答への無い問題ばかりで仕方がありへんの」とさも詰らなさうにいふ。僕は柴田君と點取りの競争をする積りであるのだ。

點取り競
争。

○點取り競争は愚の極なれども今日社會上の好地位を占むる人物孰れが點取競争の優勝者にあらざると思ひ到れば敢て尤むることも出来ぬなり。

七月十二日（金曜日）雨

餘り雨が續くので、昨今冬のやうに寒い。寒暖計が華氏の五十二度とは、此の季節として、随分珍しい。

一杯食は
ざる。

今日、漢文の試験に、支那の時文を應用問題として出された。小出先生は相變らず人が悪い。日常「此の文は必要だから、よく読んで置け」とか、「此の文は、暗誦する位に、反覆熟讀して置け」とか、試験には、出しさうな口吻を漏して置いて、すはといへば、此の始末だ。「お蔭で、教科書は度々讀まされた」と、苦笑してゐるものが多かつた。しかし、先生を恨むことは無い。宜しく、自分の甘過ぎるのを恨むべしだ。

學校から歸つて見たれば、今日も、近田の姉さんが来てゐた。又「冷遇」と「虐待」だらう。

○小出先生策士なり。試験に騒ぎ廻る愚物どもを翻弄する所流石に豪し。

七月十三日（土曜日）雨

今日は、午前中地理と作文との試験があつた。

七月十三日

一三一

七月十四日

三三三

學期試験
了る。

『試験も終つたから、もうこれで夏季休業になるのだ』と、松山君がいふから、『眞實か』と聞くと、『といふ夢を見たのだ』と言つて大笑ひ。

竹内先生に問ふて見れば、『二十日迄は、平常の通り授業があるのだ』といふこと。『そんなに勉強して頂いては、先生に濟まないなど、休みたい連中は言ふ。』

思はず、氣が緩んで、勉強が出来ぬ。夜は、福翁百話を讀んで、八時から寝た。

○試験には生徒も困るが教師も随分忙しいものだらう。採點といふ難行苦行を演らねばならぬから。

七月十四日（日曜日）曇

雨が昨日で一週間續いた。随分飽きる。今日は、曇つてはるれど、幸ひに降らなかつた。

「リーダー
讀」の音

午前四時二十分起褥。冷水浴深呼吸二分間體操の後、神田明神境内を一週して歸り、「リーダー」の音讀を反覆し、午前六時半朝食。

食後例によつて、竹坊を遊ばせ、それより、藤野君に貰つた原文の十五少年を五頁程讀み、福翁百話を讀み、十一時になつた。

午後一時。久し振りに、近田の兄さんの宅に遊びに往つた。近田の兄さんも、日曜で在宅。色々面白い雜話をして後、僕は、思ひ切つて、『兄さんは姉さんを冷遇するのですか』と聞いた。随分亂暴な、且つ、唐突な問ひ方であつたが、僕は、兄さんの氣質を知つてゐるから、臆せず遣つたのである。すると、兄さんの言葉は、更に突飛だ。『それよりも、秀君。君に聞きたいと思つてゐたのだ。秘密だよ』と念を押して、『姉さんは、嘗て、吉川といふ男と絶えず往復してゐたかい』と聞く。僕は、明快に、從來見てゐた通りのことを談つて、『それは、兄さんは、姉さんの素行を疑つて、冷遇するのですか』と、前の問ひを反復した。『いや、それで解つた。姉さんは、

姉さんの
所謂冷遇
の起

七月十四日

三三三

七月十四日

一三四

最後に、吉川といふ男と衝突をしたのだねえ。』と序幕を切つて、吉川から兄さんに送つた手紙を始め、吉川の友人某といふ名前や、姉さんの同窓の何とかいふ女から、何れも、姉さんの不利益になるやうなことはかりを兄さんに通信した手紙を見せ、『何れ、そんなことだらう。しかし、始めは驚いたよ。同時に、不愉快に思つたのだ。冷遇するといふ譯は無ければね。併し、君、心配するな。もう分つたから』と言はれた。僕も、それで、大に安心した。

政男君と二人立つて、兄さんに寫眞を撮つて貰ひなどして、歸つた。姉さんは、頭痛がするからと言つて、一寸逢つた切り、又、自分の部屋に入つて了つたので、別に話しも出来なかつたが、大したことでも無いらしい。

歸る道々、吉川といふ男は、何處迄も、悪念の強い男だ。しかし、未婚の男女は、如何に潔白であるにしても、勝手に交際してはならぬ。屹度、後

未婚の男
女の交際
の危険

悔する時が来る』と思つた。

妹は、明日から試験だといふ。今夜、晩食後、復習を手傳つて遣つた。

○釋迦も孔子も耶蘇も決して未婚の男女の交際を許しては居ない。野獸的肉慾の旺盛な而かも我儘を本尊とする米國人ですら未婚の男女の交際は嚴重な監督の下に行らせてゐる。されば自由に交際する未婚の青年男女を見れば既に男地獄乃至は醜業婦となり了れるものも心得べし。極端に言はば主人公の所謂姉さんは既に瓜田梨下の事實あり。近田の兄さんなる者冷遇虐待よりも直に此の汚れたる血を投棄すべかりしものなりとす。

七月十五日 (月曜日) 晴

澤田君來訪。『休暇早々遊びに來い』といふ。是非行く積りだ。

○予は是非といふ語が大嫌ひなり。

○日記書く筆は既に危くも夏季休業を始めんとせり。

七月十五日

一三五

澤田君と
約す。

七月十六日 七月十七日

二二六

七月十六日 (火曜日) 晴後曇

明日から、妹の學期試験が始るので、復習を手傳つて遣り、不審を教へた。

○友情探すべし。されど、依頼心を助長する勿らんことを要す。

七月十七日 (水曜日) 晴

日比谷公園で、臨時陸軍音楽隊の大演奏があるので、午後六時から聴きに往つた。山本君も富ちやんを連れて往つてゐた。音楽學校で出来た有名な流浪の民と、Rach. 氏作曲の "Pastorale" とは、特に面白かつた。山本君が『演奏の終る迄に、尾張町に買ひ物に往つて来るから、其の間、富ちやんを連れてゐて呉れないかと請ふた。僕は、何時かの羹あつちのに懲りてゐるから、『真平だ』と斷つた。兄妹共不愉快な顔をした。

陸軍音楽隊の演奏

羹あつちのに懲りてゐる。

○粉を吹くものと思ふ勿れ。

七月十八日 (木曜日) 曇

試験が済んで、重荷を卸したのも、夏休み前で、浮き足立つてゐるのと、課業に力が這入らぬ。誰も彼も、『請らぬ請らぬ』と反復してゐる。氣乗りのしない業を終り、午後四時歸宅。

浮き足立つた課業

○休暇前に勉強せぬ生徒は、ハネ前に總立ちとなる寄席や演劇のお客と

一般。締りの無い悪い癖を持つたものだ。

七月十九日 (金曜日) 晴

登校の途中、一人の女書生が、袂から、手巾ハンカチを半分落して歩いてゐたので、注意して遣つたれば、赭あかい顔をして、禮をいふた。その手巾ハンカチは、汚れて

汚れた手巾

七月十八日 七月十九日

二二七

七月十九日

二三八

試験の成績発表。

ゐた。白粉を塗る暇に洗へば好いと思ふ。

試験の成績が発表になつた。僕は内心、柴田君に負けてはならぬと思つてゐたが、同点であるのには驚いた。勉強が足らぬと見える。英語の點は藤野君に勝つてゐた。以前の藤野君であつたらば嘸悔しがつたであらう。けれども、不思議なもので、今は却つて、褒められて恐縮した。例の判事殿は、不合格が二科あつたので、大變惜氣しげてゐた。

妹の學校では、相變らず、試験の成績を発表せぬさうである。點取りの競争をさせては體育に害があるからだといふことだ。入學の際に競争試験迄遣らせて置いた癖に、随分矛盾した處置だ。是れだから女の書生に學力が無いのだらうと思ふ。

夜は、福翁百話と英文十五少年とを讀んで、九時に寝た。

○世は競争を以つて立つ。競争に堪へぬものは世の中には立てぬなり。されど女子は競争の際常に陋劣なる手段を用ひ其の弊に堪へざるも

の多し。概論すべからざる所以ならん。

七月二十日（土曜日）曇後晴

終業式。

午前八時。終業式。校長から、休暇中の心得などに就て話されたが、別段に變つたこともなかつた。式後、野球部、柔道部、擊劍部、短艇部の總會があつた。休暇中、それ、二三回宛の大會を催ふことゝなつたが、僕は旅行するので、遺憾乍ら缺席だ。

親の憂ひ

午後二時。學校から歸つたれば、近田の姉さんが來てゐたが、間もなく歸つた。「また冷遇一件ですか」と母に聞けば、「それより、此の節、近田の兄さんの素行が修まらぬとかで、一同で心配してゐるのです」と言はれた。人の親は、終生子の爲めに憂ひの種子が盡きぬものだ。

旅行準備

明日から、澤田君の好意に任せて、大旅行に先だち、房總の海岸に遊んで來る積りだから、今日は、彼れ是れと準備をした。

七月二十日

二三九

七月二十一日

二四〇

晩食後、參謀本部の地圖の「東京附近」の部を熱心に調べて置いて、九時に寐た。

○近田の兄さんの素行の修まらざるあらば果して誰の罪ならん。姉さんの平常を知れるものは多く疑はざる所なるべし。

七月二十一日（日曜日）晴

今日は、澤田君と打連れ立つて、房總への小旅行をするのである。

午前七時。身軽く支度を整へ、約束の通り澤田君を呼んだ。澤田君は、今朝遅くも七時半迄には送り届けて呉れる筈の土産の買ひ物があるからといふので、待つてゐたけれども、時刻は過ぎて来ない。それから、態々駆け附けて取つて来たのが八時十分過ぎ。汽車に乗り後れては、大變と取るものも取り敢へず、電車で上野停車場に向つたが、生憎く、救助網の故障で、又々思はぬ暇を潰し、到頭、八時四十分の急行列車に

首途の失敗。

後れた。

次ぎは十一時四十五分といふので、三時間待たねばならぬ。三時間空費するのも惜しいが、「取つて返して更に後れては、益々氣が利かぬ」と、待合の茶店に荷物を預けて置いて、上野公園を散歩した。斯んな時には、時間が非常に経ち難い。公園を一週したけれども、まだ二時間もあつた。見飽いた、パノラマ館に道入り、氣の乗らぬ動物園を見て、漸つと時刻が来た。上野平間の回遊乗車券を買ひ、三等に乗りこんだはよけれど、急行である爲めに、雑沓が甚しい。しかし、久し振りの汽車旅行、一瞬毎に都會の塵埃を離れ、霞が浦筑波峰などが、笑つて僕等を迎へる嬉しさ。澤田君の郷里なる磯原に下車したのが、午後五時四十分。澤田君から通じてあつたものと見えて、母君と令弟とが停車場迄迎えに来て居られた。嘸待たれたふとであらう。

塵埃を離る。磯原に下車。

澤田君の家は、海岸に近い、別荘風の建築で、室も庭も大變に廣くて、氣

七月二十一日

二四一

澤田君の
母君と令
弟。

七月二十二日

二四二

持が好い。母君は、五十前後の品の好い方で、令弟は、今年尋常小學校の五年に爲つた體格の好い、人懐っこい少年である。共に顔立ちが、澤田君其儘だ。母君は、勿體ない程鄭重に、僕を優待せられ、色々の御馳走をせられた。日は暮れたけれども、是非一浴しやうと、澤田君と令弟と僕と三人、海岸に出た。天妃山といふ奇岩が海波を抜いて屹と聳立してゐる邊、外洋の怒濤が盛に打ち寄せて磨き澄ましたやうな白砂を猶根氣よく洗つてゐる。

やがて、三人共着物を脱いで、逆巻き寄せる海波に戯れたが、随分冷い。震へ乍ら歸つて来て、湯に這入り、少し許談しなどして八時に寐た。

○一讀遊意勃々たらしむ。

七月二十二日（月曜日）晴

四時四時
心氣爽快

浪の音が耳につきて、夜二三度目が覺めた。柱時計が四時を報じた

海の日

ので、覺め難い澤田君を促して、共に起褥。心氣非常に爽快。

寢衣のまま、海水沿に往つた。随分冷い。浴後、天妃山に登つて、旭日の東方水平線上に上るのを拜した。海の日の出の壯觀は生れて初めてだ。深呼吸をして、海氣を貪り吸つた。海の空氣は、東京には、此上もない美味だと思ふ。汐汲む櫓の風雅な趣などを眺めながら、洗足で砂濱を跋渉して歸つた。

朝飯五椀

朝飯の美味いこと。思はず五椀を平げて笑はれた。

食後小さな市街を通つて、小學校に往き、野球を遣つて遊んだ。停車場附近、石炭の山の盛りが幾つもある。貨車も、多くは石炭を積んで居る。是れは、皆、茨城炭坑から採掘したものだとか。茨城縣の富源は此處にあるのだと思ふ。

茨城縣の
富源

十二時。歸つて晝食。食後、一時間晝寢午後二時半。海水浴に往つて、五時迄泳ひたり遊んだりして歸つた。夜八時に寢た。

七月二十二日

二四三

七月二十三日

○籠を放れた小鳥の羽叩き羨しとも羨し。

二四四

七月二十三日 (火曜日) 晴

今日も終日海に親んだ。

此の地の小學校は澤田君の母校である。「そのため校長からの依頼で野球と柔道とを隔日に兒童に練習して遣ることになつた」と澤田君が話してゐた。一緒に往つて見て、僕も柔道を十人程引受けて稽古して遣つた。

○得意際すべし

七月二十四日 (水曜日) 晴

今日は名古屋の舊跡を見て來やうと朝から騒いで支度をした。澤田君は學校の稽古を断つて置いて、態々案内して呉れた。

柔道の
大先生

名古屋を
訪ふ。

遊樂する
遊園。

珍らしい田舎道を通り平瀨に出た。一方に小さい口の開かれた池の如く湖の如きよい港で、鯉船が夥しく歸つて來てゐる。こゝは昔から鯉で賑ふ有名な港であつたが今は汽車汽船の便が開けた爲めに古の繁華は夢となつて軒を並べた遊廓などは見る影もない迄に荒廢してゐる。是れも優勝劣敗の原理に基いた當然の現象で、又止むを得ぬことであらう。

平瀨八幡

平瀨八幡は、波打際に屹立してゐる小丘の上にあつて、景色がよい。芭蕉の句を刻した石碑がある。名句でもない。

九面の
坂

このあたり目に見るものは皆涼し。
九面の濱邊を徒歩すれば、清波涼風、夏とも思はれぬやうである。只陸道を通た時、鼻を衝く魚肥の悪臭には避易せざるを得なかつた。
こゝづらやしほ満ち來れば道もなし
こゝをなこそその關といふらん。

七月二十四日

二四五

此の和歌は、慶長十四年、従一位雅宣といふ人が、救勘の身となつて、奥州磐城に左遷せられる時に、こゝを過つて詠じたものだとか。此の邊の趣を、よくいひ現してゐる。

常陸と磐城の國境に入り、山田の畦道に傳ひに、名古曾の關跡に來た。一基の紀念牌が、寂しげに立つて、昔を語り貌である。近頃植ゑた若木の櫻はあれど、一帶の松並木の色、梢の打つ斧の響きの外別段耳目に觸れるものもない。僕は、この風物の變遷を考へて、一種の哀れを感じた。

一軒の葦張りの茶店に、老婆と其の娘らしい少女とが、頻りに石摺りを作つてゐる。澤田君が氣の毒程値切つて呉れて、裏表二枚の石摺りと、十枚許りの繪葉書とを買つた。「昨日は、東京の新聞記者だといふて十人ばかりでござらした」と話してゐた。

吹風遠那古曾能關登思弊登裳美遲毛勢于散山櫻可難

文政五年三月十一日に正四位下賀茂縣主季鷹といふ人の誌す所で

一基の紀念牌。

石摺り。

左の和歌が添へてある。

千萬の仇に向へるものゝふも

花さそふ風は術なかりけり。

茲で、携へて來た辨當を使い、歸り路には、中津に寄つて、水産學校を見せて貰つて。生徒の製作した水産物の標本の、素敵に珍らしいものが、夥しく飾つてあつた。澤田君の舊友が、一々鄭重に説明して呉れたので、新智識を得たことが甚くなかつた。生徒は、皆熱心に、罐詰の製造に従事してゐた。中津は、古來、水産物の精製品で名高いといふこと。

午後四時半。此處を辭して、關本に出で、其處から、汽車で、磯原に歸つた。

○記事が少しくダレてゐる。

七月二十五日（木曜日）雨

海濱の雨程不愉快なものはない。濕つばい空氣は室内に迄襲ふて

海濱の雨

七月二十五日

中津の水産學校。

七月二十六日

二四八

来る。濃霧は朦々として海面を壓し、薄氣味の悪い沖合からは、波浪の立ち騒ぐ音が、悪魔の吶喊のやうに聞えて来る。

「君。海濱は眞實に雨が禁物だ。陰氣臭い上に、食膳には、魚の片影もなしといふ風だからね」と、澤田君は、主人振つた挨拶をする。しかし、學校に往つて、柔道の稽古を手傳つたから、幸ひに、退屈を感じなかつた。

○食膳の魚を漁るよりは、悪魔の吶喊の中に含まれし微妙の音楽を味はべし。

七月二十六日（金曜日）曇後晴

澤田君の
母上に告
別。

澤田君の母上に禮を述べて、今日は、いよく歸らうとすると、「昨日の雨に懲りくですか。しかし、まあ緩りなさいと。待てば甘露の日もありませんから」と、母君にいはれて、僕は、何と挨拶してよいかを知らなかつた。しかし、強いて嘆願するやうにして、漸く許可は受けたが、其

の代り、助川には、澤田君の叔父さんの家があるから、其處に是非一泊するといふことだけは、放免せられなかつた。

午前七時二十八分發の汽車で、磯原を立つた。澤田君の母君は、又態々停車場に送つて來られ、殊に、土産にといつて、名物の鯉魚節を一箱贈られた。澤田君は、今日も、柔道の稽古を斷つて、同道して呉れた。

八時二十二分。助川に着き、直様、澤田君の叔父さんの家に同道した。助川は、近來殊に呼び聲の高くなつた、海水浴場の一つで、東曉館など東京にも珍らしい程の旅館がある。昨今、東京から、避暑の客が轟々と詰めかけて來るので、大變に賑つて居る。

澤田の叔父さんの家は、東曉館から程遠からぬ、海濱の農家で、直東に茫々たる太平洋を控へ、磯慣松の風の音が、濤の響と相相して、仙境のやうである。澤田君の叔父さん、その他、家族の人々が、非常に喜んで迎へられた。

助川に下
車。

松風庵

七月二十六日

二四九

遊覧競争

七月二十六日

三五〇

挨拶も勿々に、手拭を提げて、游泳に出かけた。東京者らしい少年少女連も、嬉々として、盛に遣つて居る。波が穏であるから、澤田君と競争で、遠遊をした。

海栗の手捕り。海防風。

澤田君に教へられて、海栗を手捕りにしたが、面白いものだ。海防風が、幾つも砂濱に生ひ出て居る。可憐なものだ。二三十本折つて歸つた。

愉快に晝食をして、一時間程午睡をした。

太平洋の浪に抱かれる機会も、度々は得られぬからと謂つて、午睡の後、更に出掛けた。

河合先生に逢ふ。

快く晴れたので、浴客は、午前に勝つて、非常に多い。僕と澤田君とが、寒くなつたので、熱した砂の上に、ゴロリと腹這ひになつてゐると、思ひもかけぬ、英語の河合先生が、五歳ばかりの娘さんと、夫人らしい方と、砂濱で遊んで居られるのを見出し、裸體のまま、で挨拶をした。先生も、大

變態さ、且つ喜ばれた。聞けば、先生は、休暇中、此の地で消暑せられるのであるさうな。

澤田君の盡力で、船を借りて漕いで、遊び、五時半、叔父さんの家に歸り、湯に道入り、晩食をして後、澤田君と二人で、河合先生のお宿に遊びに往き、八時過ぎに、歸つて寝た。

○旅行先まで、偶然知己に邂逅するは愉快なものなり

七月二十七日 (土曜日) 晴

最終の一浴。

昨日の疲れで、五時半迄寝た。澤田君は嫌だといふので、僕一人、起きるや否や、海水浴をして、砂濱を散歩し、面白い瀧と岩とを寫生して來て、朝飯

助川を發す。

午前八時。澤田君やその叔父さん一家に告別して、八時二十二分助川發の汽車で水戸に向つた。

七月二十七日

三五二

七月二十七日

二五二

水戸見物

午前九時二十分。水戸で下車し、市内や公園などを見物し、零時二十分の汽車で松戸に向つた。

松戸に向

三等客車
内の光景

車中で晝の辨當を食し、携へてゐた福翁百話を讀んでゐる中、睡くなつたので、一時間餘り居眠りをした。室内茨城縣の官吏らしい人が、利根の水害を説明する。千住邊の工場の資本主らしい人が、その盛況を廣告する。外奴風の氣障な、ハイカラ男が、賤業婦らしいものと喃々してゐる。それを氣にして、三十前後と見える職工風の三人連の男が、目引き袖引き冷笑する。お内儀さんの連れてゐる、赤ん坊が泣く。果物屋の主人らしい男が、桃の品質を論ずる。恰も發聲活動寫眞を見てゐるやうであつた。

松戸着。

午後三時四十八分。松戸に下車し、叔母さんの家に着いた。

突然であつたので、叔母さんが大變喜ばれた。此處には、僕と同年輩の宗一君あがる。東京に來た時には、何時も僕の家へ寄つて遊んで行

松戸中學
校を見る

く。二三度は泊つたこともある。其の後、一年餘り絶えて逢はないので、何んだか早く顔が見たい。けれども、『生憎中學校に何とか會があると言つて、午から出て往つてまだ歸らぬ』といふことであつたから、學校見物旁々往つて見た。敷地は、小高い山の上にあつて、眺望は可し、運動場は廣いし、植物園など、大變立派に作らたて、校舎が頑丈で、見るからに氣持ちがよい。

宗一君に
面會。

小使に聞けば、野球の練習をしてゐるといふこと故、直ぐにグラウンドに回つて、面會をした。宗一君は、大變喜んで、僕を仲間にも紹介して呉れた。勧められるまゝ、飛び入りで、一時間餘り練習をした。

茶菓を馳走になり、いろく、學校の模様など談し合ひ、午後六時頃宗一君と共に歸つた。

心盡し鮮
のと團子

湯に這入り、晩食。叔母さんが心盡しの鮓と團子とを、八人の家族一同と共に圍坐して、談笑の間に、食後、停車場邊邊散歩して來た。松戸

七月二十七日

二五三

七月二十八日

二五四

は醬油屋が澤山あるので、町も随分富んでゐる。
九時就寝。

○活動主義の歸依者だけに成る程よく飛び廻つたものだ。

七月二十八日（日曜日）晴

東京。

午前四時起寝。冷水浴・深呼吸など、常の通りに済ませ、朝食後、留められるのを辭して、前八時十三分の汽車で松戸を發し、金町・龜有・北千住・南千住・三河島・日暮里を経て上野に着いたのが、八時五十五分。直に電車で歸つた。

旬日編一年の如し

兩親弟妹に別れて僅かに旬日の小旅行ではあつたが、一年も逢はぬやうな氣持がして、健康な顔を見るのが、馬鹿に嬉しかつた。殊に竹坊は、熱心に僕を歓迎して、留守中に買つて貰つた玩具を持ち出して、優待する。

旅行談。

一寸東京を離れてゐて、歸つて來て見れば、東京は繁華だ。

旅中は、時々、繪葉書通信をしてはゐたけれど、今夜は、家族一同、僕の旅行談を聞いて、打ち興じて呉れた。鯉魚節の土産は、母上が大層珍重がられ、日記と「スケッチ」とは、大に妹を喜ばせた。

○然り東京は繁華だ。

平凡。

七月二十九日（月曜日）晴

平凡の一日。

○此の日記無責任の極なり。平凡は平凡として平凡に記せよ。他日之を讀むの時、寧ろ非凡を感ずること歴々これあり。

七月三十日（火曜日）晴

これからがいよいよ僕に取つての大旅行であるから、今日は、終日、大

七月二十九日 七月三十日

二五五

七月三十一日

二五六

騒ぎで準備をした。

午後四時。近田の姉さんが来た。大變に憔悴してゐて。神経が過敏になつてゐて、時々、涙ぐんでは溜息を繼ぐ。

○御心配はありません。多分妊娠でせう。

七月三十一日（水曜日）曇

登山談。

朝、宮川君が尋ねて呉れた。富士登山をして来たと言つて、色々面白い談を齎した。殊に、朝日を見た時の壯觀を見るやうに話してゐたの羨ましかつた。

夏季旅行の首途。

『僕も、今日の夜汽車で出發、大旅行をする。行く先は秘密。繪葉書の通信を樂み玉へ』と言つて置いた。

午後五時。旅費金五拾圓受け取り、荷物を整理し、両親に辭して家を出た。

新橋。

午後七時。妹に送られて、新橋に着いた。發車に間もないので、直に、

新米の出札掛。

大阪行、三等切符の割引を買はうと、五圓紙幣と割引券を投げ込めば出札掛りが新米と見えて、先づ貸銀表を繰り、それから算盤を取つて、覺束ない手附きでパチ／＼遣つて見て、まだ其上小首を二三度傾け直して、漸とのことにて、切符にコトリと番號を刻して、中風病みの豆拾ひといふ手つきで、潮と釣銭と切符とを渡して呉れた。此間約五分は費したらうと思ふ。斯んな鈍間では、火花の散る様な新區驛の出札掛りは勤まならう。

僕と前後して改札口に来た一人の紳士がある。赤帽に大きな靴を擔がせて。

靴の争。

赤帽先生、止せば好いに、その旅靴を改札係に見せ乍ら『此の靴、預けな

押の強いものが勝

いで大丈夫ですか』と聞く。改札係りは、少し反り身になり、『困るね。そんな大きな靴を、乗客と一

七月三十一日

二五七

七月三十一日

二五八

しよに入れては……』と拒絶する。『では預けて参りませう』『馬鹿をいへ。それを預けては乗つてから困る。當用品ばかりだから』『それでも規則ですから』『規則？』何んな規則が？』『大きな荷物は預けるのです』と改札は赭くなる。紳士は躍起の體。『大きなつて、幾尺以上だ？』『自分量で……』『そんな怪しい自分量で扱はれてたまるものか。オイ、赤帽。宜いから持つて来い。嫌なら乃公が持つ』『それで頭押し通して了つた。此の忙しい中に、何といふ馬鹿な暇潰しをするものだらう。しかし、世の中は、押し強い奴が勝つのだ。』

三等室の三等客に、貴婦人らしから紳士らしかれと望むのは、望む者が無理であるとは百も承知だがさりとて、今少し行儀のよい仲間がゐさうなものだ。彼方も此方も、無遠慮な無作法な者ばかり。僕の真向ふに尻を据ゑた一人の男は、京都訛りの似而非紳商で、揉み上げを剃り附けた、ハイカラ頭に、本、バナマの夏帽を勿體らしく戴き、何か知らべら

似而非紳商

くした緊縮の單衣に、縮緬の兵兒帯をだらしなく巻き附けた處へ、黄色な時計の鎖を重さうにぶら下げたが、乗るや否や、三人前の腰掛を、自分一人で占領して、白毛布を處狭しと敷き擴げ、鱈魚革の手提鞆から例の空氣枕を引張り出し、醜男面を膨脹ませて、プーウ〜と炭酸瓦斯を吹き込み、その上を、絹ハンケチで包んで、三文程の腦味噌を藏めた器を重さうに載せて、ゴロリと横になり、新來の乗客が混み合ふ毎に、細く眼を開いて見れば、グウ〜狸寝入りを極め込んでゐた。僕は其の小面が憎く癢に障るので窓から妹と話す序に、故意と踏躑き乍ら、臂鐵砲を横つ腹に嫌といふ程喰はせて遣つた。

妹に別れを告げ、汽笛一聲新橋を早やわが汽車は離れたり。

汽笛一聲

八月一日 (未曜日) 晴

熱田を通るとき、地平線上に旭を拜した。偉觀壯觀、天地が急に蘇生

天地蘇生

八月一日

二五九

八月一日

二六〇

したやうである。

岐阜驛に停車の時、顔を洗つて、辨當を食し、室内が多少隙いて來たので、足を伸ばして、再び夢の人となつた。覺むれば、汽車は勢田の鐵橋上を走つてゐる。京都で、又顔を洗ひ、辨當を使つた。こゝからは、室内が更に閑靜で、僕の周圍には、残つた乗客が、僕共に僅々七人。

僅々七人

百足の様な長い列車が、梅田驛に停つたのが、午前の八時十五分。『さあ此處だ』と、手輕な旅行鞆を提げ、人力車の切符を買つて、『川口の下等な宿屋迄曳け』と命じた。『へい、』と言つて、客齎れた車をガラ／＼鳴らし乍ら遅鈍い曳き方をして、廣島屋といふ汽船問屋へ梶棒を下した。上つて見ると、驚いた。狹隘な舊式な、風通しが悪くて、暑苦しい、便所の甚く不潔な、下女の無闇に無作法な、嘘へ様も無い下等旅宿だ。車夫の野郎。馬鹿正直も時によりけりだ』などと業を煮し乍ら、取り換へるのも面倒と、其儘腰は据ゑたが、居心地が悪くて、起きても寝ても居られな

下等な旅宿

い。しかし、何も修業だと辛抱した。せめて、湯にでも這入つて來やうと、手拭提げて出かけた。少し晴々したので、ブラ／＼附近の市街を散歩しながら、歸つて見ると、『あんたはん。誠に濟みまへんがお客さんがえらうてみますさかい、此のお方はんと一緒になつとくんははれ』といふ。見れば、斷りもなく、既に僕の室へは他の客を平氣で詰め込んで、乃公様をば外の客と雜居させやうといふのである。到頭肝癩玉が破裂した。『何だ、失敬な。聞きもしないで、何故新參の客を他人の部屋に入れた。僕はこれでも先客だぞ』と、大聲に嘔鳴り附ける。番頭が來て、頻りに謝罪つて、結局、下女の失策にして丁つた。しかし、僕は、遂に部屋も譲らず、又、雜居も許さなかつた。大人げない話しながら、一寸威張つて見た所だ。それから暫時午睡して、汽車中の疲れを醫した。

午後一時、豫て志してゐた村上先生を訪ふた。村上先生は、博物の教師として、今は大阪〇〇高等女學校に奉職中であるけれども、嘗て我が

八月一日

二六一

八月二日

二六二

武士道鼓吹者村上先生を訪問

中學校にゐられ、一年餘教へて頂いた。熱心な武士道鼓吹者である。僕は先生の在京中は、幾度遊びに往つたか知れぬ。

久し振りの面會。先生も大に喜ばれた。色々の馳走を受け、夕方辭して宿に歸らうとしたれば、宿屋は無益だ。経費がかゝるから宅に泊れ」と強て止められ、使を遣つて、荷物を取り寄せられた。

夕方先生の令息で、僕と同年級であつた保造君が外から歸つて來られたので、晩食後、共に電車で道頓堀邊を見物した。

午後九時就寝。

○武士道鼓吹者といへば直に雲右衛門を聯想する。眞華節の御入來で漸と武士道を鼓吹して賣つてゐるやうでは心細い咄だ。

八月二日（金曜日）曇

午前中先生に連れられて市内見物。日記を書く暇なし。

○日記を書く暇が無い時は個條書でもして置くべし。人多くは多忙を以て怠慢の口實とす。されど思ふべし。如何に多忙の時と雖も食事もすれば睡眠もするにあらずや。其の間僅々二三分の時間を割き得ざるの謂はればあらざるべし。

八月三日（土曜日）雨

村上先生から逢つて談るに足るべき人々に添書を頂いた。今日は是非徳島縣に向つて出發しやうと思つたけれども、雨を口實に、更に一日の滞在を強ゐられた。

先生の令息保造君と共に、武士道青年會の必要を談じた。僕等は身體の強壯を重んずる。随つて、腕力を尊重する。僕等は名譽を重んずる。随つて、或る場合には、名譽の犠牲となることを辭せぬ。僕等は勤儉を重んずる。随つて、質素朴直剛毅果斷忍耐等の諸徳を修養せんが爲め、特に制慾を要求し、就中、酒色の慾に感溺するのを排斥し、「パンカラ

吾輩の主

眞の志士
仁人は都
門の中に
求められ
ず。

八月三日

二六三

八月三日

二六四

誓約。

を鼓吹する。此れ等の諸點は全然相一致した。先生も亦、それを是認せられると同時に、『その爲めに力を貸して遣る』と快諾せられた。

今日、先生の盡力で、午後から、保造君の學友なる〇〇中學校生徒八名を會合して、柔道、擊劍、角力などを闘はした。僕は幸ひに、此れ等の諸道に於て、來會者に敗は取らなかつた。僕等は、左の事を誓つた。

常に「バンカラー」たるべきこと。

保造君は、父君の許可を得て、明日より、或る時期間僕と同行して、見學を廣め、且つ、神身の修養をしやうと約された。

保造君同行を約す。

〇都門に仁人志士なきにあらず。されど都門の空氣は腐敗し易し。されば所謂仁人志士にして一度都門を入らんか當初の志氣は何時の間にか沮喪して其の腐敗に感染せざるは稀なり。活氣あり生氣ある眞の志仁眞の仁人は之れを田園の間に求めざるべからず。主人公休暇を利用して此の弊をなす。其の感受すべき「インスピレーション」盡し少からざらん哉。

八月四日（日曜日）晴

演武會に因れる儀の自他。

武徳會大阪支部の演武會が十日に行はれる筈であつたのを、先生の盡力で、今日の午後一時から、東區生玉の青年俱樂部で催された。須藤といふ〇〇中學の一年級の男を除いては、殆んど僕の相手になるものは無かつた。『東京者は口ばかりだ』と聞いてゐたが、君丈は例外だ』と、同會委員の一人が嘆稱して呉れたのは愉快であつた。僕は、東京の同志の爲めに、大に氣を吐き得たと信ずる。

會は午後六時に終つたので、保造君と共に歸來。入浴、晩食。

午後九時半。先生の家族に辭し、保造君と共に出發、阿波の徳島市及び同美馬郡の脇町に向つた。何とか丸といふ小形の汽船に乗り込んだのが午後十時。汽船の室内は至つて閑靜で、紀州に歸るといふ某海軍大尉と其姪二人。徳島に渡る大阪高商の生徒二人と其老父一人。

内海の瀬戸

八月四日

二六五

八月五日

二六六

それに、富士登山をして来たといふ三人連の壯者を併せて、都合十一人漁船は徐行を始め、頻りに漁笛を鳴らし乍ら、川口を出て、闇の瀬戸内海に乗り出した。四顧闇黒、只「スクリユ」の波を切る音ばかり。

○光の瀬戸内海を早く見せたし。

八月五日（月曜、日）晴

「お客さん。顔を洗ひなれ」と、「ボーイ」が大聲で囁鳴る。保造君と相前後して起き出で、口を嗽き顔を洗つたのが四時七分前。舳に立つて深呼吸をし、二分間体操を三回續けて後、保造君と相撲を演る。船員が二人「スキーパー」を持つて笑ひ／＼見てゐる。「オイ。一番来い」と挑めば、意氣地もなく避易して了つた。やがて「キャビン」に歸り不味い朝飯乍ら四椀餘り平げた。

徳島の川口。

午前六時。徳島の川口迄来たけれども、干潮で船が着かぬ。「こんな

「オイ」番来い。

ことが度々ある」と、高商の生徒が話してゐた。二十分間程停船してゐると、小蒸氣船が迎へに來たので乗り換へ。随分混雑した。船底の、窒息しさうな處に押し込められて、小さい丸い採光窓から、吉野川の右岸を目送し乍ら、午前八時に漸く徳島に上陸した。直に目指す人を訪問したけれども、生憎不在。

脇町に向ふ。

直に引き返して、停車場に駆け付け、八時五十分、脇町に行くべく船戸迄の切符を買ひ、直に乗車した。

長命術。

汽車といへば速いものゝ様に誰でも思ふであらうが、これは又、世界無類の香氣な汽車で、コトリ／＼と少し動いたかと思ふと直に次の驛に停る。停れば、悠々十分内外もへばり附いて、容易に發車しない。驛長がのそ／＼出て来て乗客なる婆さんと世間噺しをする。それに飽きた時分、漸くヒリヒリ／＼と氣だるい呼子を吹き鳴らす。機關車は思ひ出した様に、ポーツと應へてまたコトリ／＼と動く。少し動く

八月五日

二六七

八月五日

二六八

とまた次の驛になる。又停る。斯くして僅々二十一哩の距離を約三時間も費やして行き着くのである。東京から来た性急者には、殆んど忍ぶべからざる香氣さであるが、此の地の者は眞面目な顔で乗つてゐる。長命する筈だ。

正午少し前、船戸に着く。これから、四國第一といふ吉野川を船で横り、一里餘の道をテクついて、脇町に着いた。脇町は吉野川に沿ふた小市街で一寸氣の利いた土地である。吉野川は、洪水が猛烈で、架橋が困難であるから、それで、今でも渡し船を用ひてゐるのだと、保造君が説明する。しかし、吉野川の渡し船といふと名を聞いただけでも古雅で面白

保造君と協議の上、稻原といふ旅館に泊る。

○四時醒醒たる東京者には香氣な汽車に乗るのも亦一つの修養なり。

吉野川を
渡り脇町
に着

八月六日（火曜日）晴

富山先生
訪問

當地中學校の理科擔任の富山先生を訪問した。先生は、村上先生の無二の親友で、保造君もよく先生を知つてゐた。先生は、來意を聞いて、非常に喜ばれ、殆んど半日を割いて、色々談された。

晝食を馳走になり、午後一時、先生に連れられて、中學校を往つて見た。田舎の中學校は、何處を見ても、規模が廣大だ。かゝる場所でなくては、天下の健兒は成育しない筈だ。

先生の盡力で、明日、同校内にゐる健兒會を召集して頂くことになつた。

午後六時。歸宿入浴、晩食の後、吉野川邊を散歩し、工兵の大架橋工事を見、歸つて快談、九時に寝た。

○中學校若しく高等學校時代は宜しく田舎に出て修養すべし。余の郷里

八月六日

二六九

天下の健
兒。養成
所。

大架橋工
事。

八月六日

二七〇

の若者にも田舎にて中學校を落第し、面目無しとして上京の上豫定の墮落をなせるもの三人。大學の優等生に田舎の中學生にあらざる者幾人がある。余は乳臭き青年が心身の根本的修養場たる田舎を見捨て莫大の経費を犠牲として危険且つ不健全なる部門に入らんとする者の多きを嘆ぜざらんと欲するも能はざるなり。

八月七日（水曜日）晴

健兒會。

午前七時から、保造君と共に、中學校で催された健兒會に出席。富山先生の紹介で、僕も、保造君も、一場の演説を試みた。此處の中學生の、四年級の奥田といふ雄辯家は、衆に推されて、『遠來の珍客を歓迎す』といふ意味の演説をし、次いで、僕の唱道する武士道實行の精神を賞揚し、『僕等は及ばぬながら麒麟尾に附して其の實行を期する覺悟である』と盟つた。

不言實行の世界。

此處の郡長の飯沼といふ人も、奥田君の演説中ばに臨場された。奥田君が壇を下るや否や、進んで演壇に上り、『武士道の實行といふことを

青年者の口から聞くを得るに至つたのは、近來の快事である。諸君は、國家の爲め、大に自重し、誓つて其志を貫徹せられよ。惟ふに、二十世紀は、言行一致の境を通り越し、最早、不言實行の世界となつた。諸君は、此一事を忘るゝことなく、明日よりとも、言はず、今日只今より、これが實行に着手せられよ』と述べられた。

果せる哉。幹事の注意で、頭大の握り飯と鯛の干物と梅干とを晝食に出したのは大に振つてゐた。

晝食後、柔道、擊劍、相撲などの競技があつた。僕は、擊劍と柔道とだけは、最優勝者であつた。技術だけは、地方の者はまだ東京者に劣つてゐる。しかし、此の炎熱の中で、汗に浸され乍ら車輪の如くに活動して、更に疲れた色のない、活潑々地の大英氣は、僕等の到底企て及ぶ處でない。愉快の中に閉會を告げたのが、午後四時半。

『武士道實行者が、旅館に止宿でもなからう。不便でも、東京への土産

八月七日

二七一

中學校の寄宿舎に宿泊。

活潑々地の英氣。

鯛の干物も、武士道なり。

八月八日 八月九日

二七二

だ、今夜から寄宿舎に来玉へ」と言つて、富山先生は、僕等を寄宿舎に宿泊せしめるやう盡力された。

○夜は廣い寄宿舎の中に大の字が二個出来たことなるべし。

八月八日 (木曜日) 雨

無事。
終日、遊びに来る生徒の人々に接し、互に日常の學校生活の模様など談じ合つた。

○話題をでも個條書にして置きたし。

八月九日 (金曜日) 曇

撫養にと
志す。
今日は富士飯沼兩先生を始め、多くの同志に別れを告げ、豫ての志でもあるので、鳴戸見物の爲め、保造君と二人で板野郡の撫養に向ふことにした。

寝て暮す
のが苦し
く好き
な夕立。

清波渺々

午前七時。徒歩船戸に行き、同八時五十分汽車に乗り、同十一時徳島に着。僕が先を急ぐ爲め終に徳島の戸水先生訪問を見合はせ、三里半の行程を徒歩。炎天の徒歩は、側目程苦しいものではない。汗が出て、却つて涼しい。寝て暮すのが一等苦しいのだ。途中、僕の好きな夕立に逢つた。雷鳴天地に轟き、電光目を眩し、雨脚大地を壓し、壯絶亦快絶。途中大河多く、四たび危い船橋を渡つた。

午後一時。撫養に着き、水野といふ宿屋に泊る。清波渺々、土佐泊の近景、淡路島の遠望、名家の油繪を見るやうだ。

保造君と共に、久し振りに海水浴をした

○好きだといふだけ夕立の形容大袈裟。

八月十日 (土曜日) 晴

旭日を浴

四時に起き、旭日と海波とを同時に浴した。爽快愉へやうが無い。

八月十日

二七三

八月十日

二七四

朝から世間が何となく騒がしく、人が往つたり来たり罵つたりしてゐるので、『何事か』と宿の女中に聞けば、『爪が揚がるので』といふ。此の地では、毎年夏の頃、『ワン』と稱する一種の大爪を飛揚する習慣で、此の地の名物の一つであるさうな。好機逸すべからずと、早速に駆け附けた。保造君と共に、教へられた濱邊に出て見れば、遠近の老若男女が、雲霞のやうに集つて來てゐる。聞けば、此の『ワン』の揚がる日は、附近の町村全部、業を廢して狂氣の如くに騒ぎ立ち、遠くは讃岐・伊豫・土佐、海を越へて京阪の地方から、態々見物に來るといふ騒ぎだとか。

爪の形は正圓形、大さは、大仙貨紙の千枚綴ぎで、殆んで、百坪に餘つてゐる。骨は四寸直径の杉丸太を心にして、徑三、四インチ大の青竹を、縦横十文字に搦み合はせ、釣瓶繩のやうな糸目を附け、長さ二三十尺の、兩手で握り餘る太さの大綱を尾にして、其の末端に柱のやうな丸太が附けてゐる。爪系の太さは、學校の綱引用のものに勝つてゐる。

萬事が餘りに大袈裟に出來てゐるので、保造君も僕も、是が空中に舞ひ上るものとは信じ得ない。二時間許り見てゐたが、まだ揚げる様子がない。二人共、朝飯前で、腹が減つて來たので、一度宿に歸り、食事を終つたのが九時半。

午前十時少し過ぎ、再び出て見る。二人がそこに着くや否、群集が一同にワット騒ぎ立つ。見れば、彼の大爪は、凄じい勢で、今や地を離れやうとする一瞬間。例の綱引用の糸には屈強の壯者が、蟻のやうに集つて、犇々と押へ附けてゐる。爪に最も接近した處から、漸々に手を放せば、大爪は、海風を孕んで、猛りに狂ひに狂ひ、魔軍の喊聲を聞くやうに、恐ろしく鳴動して、左右にゆらぐ。其の度毎に、太い長い爪の尾は、のた打ち廻る大蛇のやうに、砂を掘り砂を蹴つてゐる。壯者の群が、秩序正しく、片端から手を放つ。『二十間。三十間。百間。二百間。五百間。千間。二千間。』綱に附けた木札を見て、率領が大聲に宣言する。

八月十日

二七五

八月十一日

二七六

今や大風は、大空に糊着けにしたやうに静に、澄み切つて下界を見卸して呻吟てゐる。群集は、幾回となく、拍手し喝采する。何等の壯観。

武士道の
未來。

僕は、生れて以來、斯んな男らしい、而かも、無邪氣な遊戯を見たことがない。『これが、即ち、武士道の未來である』と、保造君はいふ。『其の蠻カラの處が、如何にも、僕等の理想に接觸してゐる』と、僕は言つた。

午後一時。歸つて來て晝食。再び海水浴をして、後、大風を卸すのを往つて見た。

○此の記事の如くんば、撫養の大風は、小技工を交へざる原始的の雄大な遊戯にして、ヘッポコ飛行機を挺づること敢等。

八月十一日 (日曜日) 晴

終日海に親しむ。

○大風に毒氣を抜かれて戦ふべき記事なきが、否か。

八月十二日 (月曜日) 雨

海邊の雨は、何處も同じで、不愉快だ。終日讀書に暮らす。

夕方、開運丸といふ大汽船が入港した。これは、撫養の食鹽を東京に積み廻すものであるさうな。

○鳴戸鯛を撫養の鹽で炙つて、麥飯に添へて喰つて見たきものなり。

八月十三日 (火曜日) 晴

鳴門見物

胸が躍る

前四時起床。今日は、豫ての宿志たる鳴門見物に出かけるのである。鳴門の壯観は、屢々村上先生から聞いてゐた。而して、其の雄大な風光を想像してゐた。僕等は、やがて此の塵外の大天地に身を置くことが出来るのであると思ふと、胸が躍る。

鳴門を観るには、潮時を計つて行かねばならぬ。何となれば、此處の

八月十二日 八月十三日

二七七

異現象。

偉觀は、潮の満干から起る一異現象だからである。今日は、陰曆の十六日、午後零時二十二分が、恰かもお好みの大潮といふのであるから、非常に都合がよい。

早や、輕舸の用意も出来た。保造君の命令で、辨當茶菓子果物など堆く積み込んだ。

時分はよ

午前十時。「時分はよし」と屈強の水夫二人が櫂を操縦り、鳴門を指して漕ぎ出した。波の蜿蜒は、陸から見たのとは異つて、随分大きい。舟は、木の葉のやうに、玩ばれる。大小幾百の奇礁、怪岩は、逆巻き寄せる外洋の大波を碎いて、飛沫が白く雲煙のやうに散じてゐる。僕は一々此の壯絶の光景を寫生しやうと、「スチツナブック」を取り出せば、水夫が慌て、これを制したので、氣が附いて見れば、成る程、此の邊は要塞地域内である。

要塞地域内。

漕ぐこと二時間許り、舟は段々鳴門に近づく。真正面には、巨人の鑿

海潮の大飛瀑。

で粗刻したやうな淡路島が、奇抜な風姿を海に浮べて横つてゐる。此方に向つて腕を伸ばし、鳴門に肉薄してゐるのが、行者の鼻、その右方には、荻藻浦、福良灣などを抱へてゐる。その右方に近く、舟の進むに連れて、千變萬化の姿を示してゐるのが飛島である。左の方からは、鳴戸島の姥が鼻が、迫り迫つて、銚子の口に臨み、裸島を距てて、行者の鼻と相對してゐる。僕等の舟は、銚子の口の、海潮の大飛瀑の鼻先を迂回して、裸島に着いた。水聲轟々、耳を聳するばかり。鳴戸の潮さきに、點々としてゐる漁船の群など眺め乍ら、辨當を食して後、水夫の先導で、裸島に這ひ上つた。島は水成岩の一種から成つてゐて、崩れ易く、屢々足場が碎け飛んで、危険であつた。島蔭には、桔梗女郎花などが咲き誇つてゐるのも、時に取つて物珍らしい。やがて、頂上の岩頭に屹立し、交に南北を遠望した。南は、渺々たる大平洋が、遠くく連つて、其の末が天を摩し、北は湖水のやうな瀬戸内の海面が、鏡まりかへつて鏡のやうである。

外洋と内
海との接
觸点。

八月十三日

二八〇

何たる好對照。此の太平洋と此の内海とが迫つて來て相接する處が、即ち有名な鳴戸である。今や時は、太平洋の大干潮、内海の大満潮。兩水面の高さは、約十丈の高低がある。斯くして、此の急斜面を轉下する大潮流は、般々轟々と凄まじい氣勢を示して、天下の大偉觀を形成してゐるのである。折しも、一艘の大帆船は微風を孕んで、瀬戸内の方から進んで來たと見る間に、此の激流に乗つて、急轉直下。其の速いこと大鵬が身を疾風に委ねたといふ有様であつた。保造君も僕も、恍惚として、魂は只、此の大天地の間に鎔けて漲ぎつて了つた。

魂鎔けて
天地に漲
る。
底なしの
大穴。

僕が子供の時には、『阿波の鳴門には、直徑一里の大渦が卷いてゐる。これは、龍宮世界へ潮流の落ち込む、底なしの大穴だ』と聞いてゐたが、そんなものは、更に見當らぬ。水夫に聞いても、知らぬと言つてゐた。世間の人々は、斯んな無責任な嘘を、平氣で話すのである。
午後五時半。僕等は、再び水野旅館に歸つた。

○底なしの大穴は阿波の鳴門にあらずして、お江戸の真中に幾つもある。其處の渦に巻き込まれたものは、龍宮でない無限地獄に陥ち込んで了ふのだ。

八月十四日（水曜日）晴

土佐泊。

朝、海水浴をして後、土佐泊に渡り、紀貫之の古跡を尋ね、碑文など見て來た。

鳴戸鯛の罐詰と、繪葉書とを、妹に宛て、郵送。宮川君、澤田君にも、繪葉書や手紙を出した。

撫養出發

午後六時半。汽船に乗り、撫養を發した。海上平靜。俗に小鳴戸と稱する海峡を通過する時の景色は、又格別、やがて、船は海峡を抜けて、瀬戸内に向つて進む。

○紀貫之の古跡を尋ねて日記に熱心な著者の感興は更に深かつたことであらう。

八月十四日

二八一

八月十五日

二八二

八月十五日 (木曜日) 晴

神戸着。

嗚呼湊川神社。

布引の瀧
再び孤客
となる。

佐伯文雄
氏訪問。

午前二時。神戸に着船。三時半。相生町の加藤館といふに上つて休息。朝食の後、保造君の案内で、湊川神社に参詣。嗚呼忠臣楠子の墓前に禮拜して、思はず落涙した。境内は、至つて廣い。池には、龜が澤山飼つてある。水族館もある。只、淺草奥山のやうに、見世物の澤山あることは、此の神聖な境域を俗了せしめて、不愉快に感じた。それから、市内を見物して、大佛を見、居留地を通り、布引の瀧を見て、後、保造君は、電車で歸り、僕は、再び、孤客の身となつた。

午後三時。保造君の紹介狀を持つて、山本通四丁目十五番邸の佐伯文雄といふ、當地中學生徒の志士を訪問した。文雄君も、青年武士道の實行者として、有望な人物だと思つたが、更に其の母堂に逢つて、大に感じた。佐伯君の母堂は、僅かに、賢夫人である。僕等の志を聞いて、大に

同情を寄せられ、過分の讃辭と獎勵とを與へられ。

此の夜は、強いられて、同家に宿泊。

僕は思ふ。神戸は奮闘の巷である。人の言葉迄が東京のそれよりも、遙に活氣を帯びてゐる。吁、東京は、竟に長袖の都人士が浮華虚榮を夢みる寢室と成り了るのではあるまいか。

○上方も今は下方となれり。下方者は弱からず。東京ッ兒といふ言葉がやがて弱い者の代名詞に用ひらるゝに至るは、惟ふに遠き將來にはあらんか。

八月十六日 (金曜日) 晴

長談義。

佐伯君の盡力で、同志の青年三十名許が、午前九時から、公會堂に集會した。僕の『東京の中學生氣質一班』、『旅行中の所感』、『青年武士道の奮起を促がす』といふ三題の長談義は、多大の同情を以て歡迎せられた。

八月十六日

二八三

近景遠望
共に絶佳。

八月十七日

二八四

午後二時。須摩に遊び、一ノ谷須摩寺などを見た。此處からも淡路島の眺望は絶佳である。淡路島は、近づいて見ても、遠ざかつて見ても、美的である。

途中、家郷に宛て、繪葉書を送る。

今日、午後六時。神戸出港の伊豫丸に乗り込む筈であつたが、果さなかつた。

○光の瀬戸内観如何。

○明日の記事を一讀せられんことを。(著者)

八月十七日(土曜日)晴

五人抜き
の優退。

午前中、青年體育會の擊劍會を見た。僕も、飛び入を許され、數番の試合を試みた。傍侘にも、五人抜きの後優退。佐伯君は大變喜んで呉れた。

スケッチ
に忙殺。

午前十一時。佐伯君一家に篤く禮を述べ、汽船香川丸に搭じて出港。瀬戸内の航海は愉快なものとは聞いてゐたけれど、斯く迄とは思はなかつた。人が、世界の瀬戸内と嘆賞するのも無理はない。遠近の島々は世界のあらゆる島嶼の標本を陳列したかと思ふ程、千姿萬態の趣を示し、清く静かな海面に映じてゐる。僕は、其の「スケッチ」に忙殺される程であつた。

魔風。

船中に、「ハイカラ」娘が二人乗つてゐて、英語交りに、趣味とか戀愛とかいふことを語り合つてゐた。此の清淨のにも、斯かる魔風が遠慮會釋もなく吹き荒んでゐるのである。

「スケッチ」は忙しい中にも「トントン」と平担の調子を取り、船は静かに波を切つて進みに進む。

○瀬戸内の景色に見惚れてばかりゐては大人物になれぬかも知れない

八月十七日

二八五

八月十八日

八月十八日（日曜日）晴

二八六

新居濱の
砲台。

午前四時過。イの一番に起きて、甲板に上り、遠近の景色を眺望した。船は、今や、伊豫の新居濱を離れ、砲臺の附近を進航中。僕は思ふ。「此の砲臺が眞面目に砲火を吐く時があつたらば、それこそ、國家危急存亡の秋であらう」と。船尾に立つて、來し方を願れば、静かな、平和に充ちた海面には、黄金色の旭日が、波の中から、三分方浮び出てゐる。見る間に、それが、半分出る。七分方出る。やがて、眞圓い全部を現はして、豊に、水平線を離れた。僕は旭日を拜む。毎に一種崇高の感に打たれて、全身に満々たる靈氣を注ぎ込まれる様な氣持ちがする。日の出は、毎日見たいものだ。僕と感を同ふする仲間であらう、商人風の男三人、官吏風の男一人、書生風の男一人は、共に來つて、此の靈感に浴した。禮拜するものもある。深呼吸をするものもある。又は、黙つて、打ち凝視つてゐるものもある。

旭日躍る

四國一の
最高峯。

のもあつた。左舷の方遙かに高峯を認めたので、書生風の男に聞けば、「これこそ、四國山系中の最高峰、石槌山である」と教へて呉れた。その男は、三回許り登山したことがあると謂つて、山の模様を精しく説明した。

高濱港。

前八時。船は、伊豫の高濱に着いた。此處は、松山への關門で、水が深く、波は靜かに、而かも、前面には、伊豫の小富士と稱する興居島形の珍しい四十島を扣へて、便利な上に風光の美を兼備してゐる。直に上陸。

松山着。

棧橋を通り盡せば、停車場がある。松山迄の切符を買ひ、汽車に乗つて、梅津寺の海水浴場を過ぎ、三津古町の驛々を経て、松山に着。直に、母の弟に當る久保彦一といふ叔父の家を尋ねた。叔父は、當地の高等小学校長である。僕と五歳の時以來の對面であるが、母から豫報してあつたので、「心待ちに待つてゐた」といはれて、嬉しかつた。

水泳場を
見る。

晝食後。叔父に連れられて、小學校の水泳場を見た。三百人餘の女兒

八月十八日

二八七

八月十八日

二八八

が盛んに水練中である。其の技の熟練されてゐるのと、一般に活潑であるのとは、一驚を吃した。僕は男兒がゐないのを不審に思つて、聞いて見れば、『男女は時間を異にして居る。混じて遣らせて、自然主義でも振り廻はされては閉口だからね』と叔父は笑はれた。

午後二時半。稲田果樹園などに沿ふて、徑路を傳ひ、本道に出で、徒歩、道後温泉に浴した。温泉場の建築の壯麗なこと湯の清潔なことなど、豫想外であつた。それから、公園に往つて、城山御幸寺山石手川の長堤などを指示し乍ら、色々説明を受け、繪葉書を買ひ、汽車で歸つた。

家郷と澤田君宮川君藤野君などに發信。

○生活難の味を知らざる松山に生活する能はざる者は天下何れの地にも生活する能はずといふ者あり。果して爾るか。

○明治三十七八年の役露國の捕虜を此の地に收容されて以來そんなでもなくなれり。(著者)

道後の靈泉に浴す。

八月十九日 (月曜日) 晴

朝、再び道後に入浴。

午前八時。叔父の盡力で、陸軍省管轄の松山城を見物した。

午後。家に居て、色々叔父と談した。例の『武士道の實行』といふことには、大賛成で、『明日、同志を集めて紹介して遣らう』といはれた。

○斯く武士道の渴仰者到る處に充滿せば我が國の將來は頼もしきことならずや。

○武士道の渴仰者は極めて尠し。尠きが故に珍らしく珍らしき故に書き立つ。書き立つるが故に到る處に充滿せるやうに思はるゝのみ。(著者)

八月二十日 (火曜日) 晴

叔父は、水泳場の監督に行かれるので、叔父の氣に入りの卒業生で、目

八月十九日 八月二十日

二八九

松山城を見る。

八月二十日

二九〇

下中學校の五年級にゐる、中川といふ生徒を頼んで、僕は案内して貰つた。

三津の朝
神傳流の
選手。

中川君は、中學校の優等生で、志操の健全な、真面目な男だ。中川君に伴はれ、午前六時、汽車で三津ヶ濱の有名な魚市場を見物し、後、梅津寺の海水浴場に往つた。中川君も僕も共に、やがて飛び込んだ。中川君は神傳流の選手で、實に達者な者だ。

居島桃

昨今の酷暑で、浴客は、廣い休憩處から海濱一面に充溢してゐる。游泳の後、小舟を雇つて、四十島附近で釣を垂れ、ギザメを四五十釣つた。後、興居島に渡り、名産の興居島桃を買ひ、午後五時十五分、汽車で松山に歸つた。

雄辯に驚く。

此の夜、叔父と中川君との盡力で、武士道青年會を、叔父の學校に開かれ、四十人程集つた。僕も、一場の演説を試みたが、來會者も大に論議した。僕は、松山青年の雄辯に驚いた。

○夏目漱石氏釣遊の故事も思ひ合はされる。

八月二十一日（水曜日）晴

湧ヶ淵。

今日は、當地の絶景たる、湧ヶ淵を見物すべく、叔父に勧められたが、休暇も段々餘日が無くなるし、未だ見たい處が多いので、好意を謝して、出發することにした。

松山出發

朝、兵營師範學校などを見て歸り、松山の名物伊豫絋の上等を母に郵送して置き、繪葉書など買ひ求めて、午前十時に出發して。昨夜の志士連中が、傳へ聞いて、停車場迄見送つて呉れた。

程月の瀬

前十時五十分。高濱出港宇品行の汽船豊浦丸に乗る。此の船は、遊覧船で、大變美しくしい。島山の相迫れる處を通り抜け、正午頃、彼の平相國清盛の開鑿したといふ程月の瀬戸を過ぎた。潮流が極めて急である。「是れは、清盛が、嚴島で、或美人を見初めて、絶えずこれを

八月二十一日

二九一

八月二十一日

二九二

大蛇清盛
を追ふ。

近づけてゐたが、それが辨財天の権現であるといふことを知つて、逃げて都に歸らうとした時に、彼の美人は、始めてそれと心付き、海に躍り込んで、大蛇となり、波を分けて、清盛を追つかけたが、此の海峡にさしかゝる時、清盛は、潮若し心あらば逆潮となれと言つて願みて一睨したので、潮は忽ち逆流して、彼の大蛇を追ひ退けたのに始まる』と、同船の老人が嘶してゐた。

吳軍港。

吳軍港は、入海が幾多の島陰に深く、灣入した處にあつて、要害が如何にも堅固である。三笠形の戦艦が二艘と、三艘の砲艦と、一艘の練習艦らしいのが碇泊して居り、造船所からは、盛に煤煙が立ち上り、機械の響、鐵鏈の音が手に取るやうに海面を渡つて来る。

宇品。

午後二時。宇品に着。直に上陸。名高ただけに流石は良港である。土佐丸を始めとして、七艘の汽船と無数の帆船が碇泊してゐた。馬關行きの天龍川丸が今や拔錨といふ時で、四五人の客は直に乗り換へた。

廣島着。

汽車で、廣島の幟町なる、近田の兄さんの親友、小野寺といふ工兵少佐の宅に着いたのが、午後三時四十分。小野寺氏は、僕と一面識もなければ、僕の旅行前に、近田の兄さんから、是非寄つて泊つて遣つて呉れと、再三言はれてゐたので、着早々尋ねたのである。豫期以上の歓迎を受けて、却つて恐縮。

夏向きの
市街。

市内を散歩したが、随分廣い。川が五六筋、市中を縦断してゐて、橋が非常に多く、如何にも夏向きの、涼しい市街である。

柴田君訪
問。

夜、歸省中の柴田君を訪問した。幸ひに在宅。非常に驚き、非常に喜んで呉れた。『明日は、是非、來て宿泊して呉れ』と迫られた。

○程戸の瀬戸逆潮の謂はれ、因念、無論同地のお伽噺なるべけれど、此の小説の中に、清盛の性格は、勿論、其の生涯を巧に説明したるは、惟ふに當時の名士の傑作なるべし。

○明治の平相國を以つて自ら任ずる豪傑も、つい手近にあるならん。

八月二十一日

二九三

八月二十二日

二九四

八月二十二日 (木曜日) 晴

大本營。

午前六時。食事中、柴田君が来て呉れた。

午前七時半。柴田君と共に、小野寺氏に連れられ、大本營の跡を始め、淺野家の泉邸やら、水道の水源地やらを見物した。大本營は、規模が至つて小さく、日清戦役の當時、畏くも、陛下が御親ら、軍機を御綜縦遊ばされたことを追想して、轉た、感涙に咽んだ。泉邸の邸園には、山あり池あり、廣く清く、雅趣満々たる風景は、維新前の大名の豪奢の有様を説明してゐる。水源地には、清水が溢れ、涼風が漲ぎつて、夏は何處にあるかと思はれる程であつた。

水源地。

午後六時。柴田君の好意に任せ、小野寺氏に深く謝して別れを告げ、往つて泊る。

此の夜柴田君と連名で、澤田・山本・宮川・長野の四君に繪葉書を發送し、

猶、郷家にも通信した。

○大本營の故事畏しとも畏し。

八月二十三日 (金曜日) 曇後晴

午前、中柴田君に導かれ、市内の其處此處を遊覽した。

武士道實
踐に關し
て氣焔。

午後、柴田君の舊友數氏と會合。僕は、例の武士道の實踐に關して、大氣焔を吐露した。

夜、柔道の小集會を催して呉れた。

○武士道は口で説くべからず心で傳ふべきものなり。

八月二十四日 (土曜日) 晴午後曇る

宮島に向
ふ。

柴田君に別れを告げ、午前七時四十五分發下關行の汽車で、宮島に向つた。横川己斐五日市を過ぎ、「名物大石餅」と節面白い賣り聲を聞き殘

八月二十三日 八月二十四日

二九五

八月二十四日

二九六

大狼狽。

し、二十日市も夢の間に過ぎ、宮島驛に下車したのが、午前八時二十六分。小蒸汽船で海峡を渡り、宮島に上陸。十人餘りの客引きに包圍攻撃を喰つて、大狼狽。

鹿遊ぶ。

見渡せば、湖水のやうな網浦の邊、潮に浸されてゐる大華表には、有栖川宮殿下御直筆の扁額が嚴として仰がれる。廻廊の影鮮やかな社殿の近くには、は、鹿も五六頭遊んで居る。

蘆雪の山姥。

案内者に導かれて、本社に詣で、其處此處を參拜した。古來名家の繪畫、彫刻、古器物など、何れも目を驚かすものばかり。中にも、蘆雪の山姥などは、日本畫の爲めに萬丈の氣を吐いてゐるやうに思はれた。何といつても、清盛を始め、世々の名將の信仰が深かつた爲めか、古來の美術家が神を籠め腕を揮つた傑作物の大展覽場である。

千疊閣。

千疊閣、五重の塔の大規模は、流石豊大閣的である。千疊閣に、婆さんが力餅といふのを賣つてゐる。これは、太閤が征韓の際に、將士の首途

辨財天の何故武の神。

を祝する爲め、拵へて一同に願たれた、速成の餅の面影であるそうだ。

『辨財天といへば、美しい女神であるから、清盛とか、秀吉とか、乃至は〇とか、總て、好色家が信仰し來つたのは、其の理由が明瞭であるが、何故、斯く世々の明將傑士の祈願が多かつたのであらうか』と、案内者に聞けば、案内者もさる者、此の土地は、神功皇后の三韓御征伐以來、何時も、外國との交戦の際には、出兵の津に當つてをりやしたけん、手近にある此の御社に來ては、武運長久を祈つたのでがんせう。』と語つてゐた。

紅葉谿。

小さな店で、晝食を濟ませて後、有名な紅葉谿を見物し、それから、彌山に登ることにした。紅葉谿は、奥深い谿谷から、利刀を鑿いて流した様な、互え切つた水が、蟻蜒屈曲石に激し岩を嚙んでゐて、其の上を幾千株の楓樹が掩ふてゐる。秋の眺めは、嘸かしと思ひ遣られる。處々に橋があり、又、亭がある。仙境とは、斯んな處をいふのであらう。此の仙境に、亞米利加人の男女が四五人居るのみで、遊客の少いのは不思議であ

八月二十四日

二九七

八月二十四日

二九八

彌山の途

つた。

やがて、彌山の道にかゝる。野津將軍の別荘は、其の昔、雪舟の作つた庭を、其の儘に保存したものだとかで、脱俗の趣きがあることはいふ迄もない。此の邊、古刹の趾が極めて多く、一々説明も聞いたけれども、記憶してゐない。高倉帝以來、世々の皇帝が、屢々龍駕を駐めて坐るに楓林の晩を愛させ給ひ、近くは、日清戰役の際、今上陛下の御幸もあつて、春畝侯の筆の跡を巨岩に刻まれてゐるのと共に、其の光榮を後世に傳へてゐる。途中、服装の賤しい少女が、其處此處に、鹿の餌を賣つてゐるのを見た。降つて來た夕立に浴し乍ら、十八町の上りを、息もつかず登り詰めた。昔、僧の空海が闢いたといふ險路で、潜り岩、缺み岩の怪岩が、彼方にも此方にも屹立して、恰度、妙義山の趣きがある。下瞰すれば、瀬戸内海は、庭の泉水のやうで、築山のやうな四國島、浮藻のやうな小島々々が、指呼の間に彙つてゐる。宮島を日本三景の一に入れたのは、此處

一目の瀬戸内。

を見てからであらうと思はれる。

「スケッチ」を取りたいけれども、要塞地域になつてゐるので、不可。

左を眺め、右を望み、岩に飛び附いて見たり、谷に飛び込んで見たり、何時迄も興は盡さぬ。しかし、案内者は、餘程疲れたらしく、生欠伸をし乍ら睡さうにしてゐる。時計を見れば、もう六時過。驚いて山を下つた。龜福といふ旅宿に案内された。入浴して汗を流し、庭の噴水とさし向ひで夕飯を食し、埋れ木細工、繪葉書など買ひ調へて、家郷に發送。十時を過ぎて、寢に就いた。

○宮島の勝は君が虚飾なき筆によつて天下に傳へらるるならん。

八月二十五日（日曜日）雨後晴

午前五時起褥。例に依つて、冷水浴、深呼吸などして後、再び社殿に參詣し、歸つて朝食。

八月二十五日

二九九

下山。

噴水に對して食す。

八月二十五日

三〇〇

宮崎君。

午前八時。汽船で、停車場に行き、八時二十六分、下關行の汽車に乗つた。岩國で下車して、有名な錦帯橋を見やうと思つてゐたけれど、餘りの大雨で、見合はせた。

海外發展

沿道は、平凡で、別に目を慰める景色もなければ、列車が清潔で、驛員車掌などが親切で、大層心持ちがよい。同室内に、上海に往つてゐる大阪商人の、小供を連れられたものがあつて、上海の模様を色々話した。此の商人は、五年前に、二人の女兒を残して妻に死なれ、それから、家政が不如意になり、商業には失敗する、困窮の餘り、當時十歳になる長女を連れ、三才になる次女を親族に托して置いて、上海に出掛け、小さい商業を營んで居たが、段々運が向いて来て、今は、雇人を五人ばかり使つて、藥舗を開いてゐる。されど、常に、國に残してある次女のことを氣に掛る爲め、今度、それを連れて行く爲め歸國したのだと話してゐた。後妻を迎へたかと、隣席にゐる田舎者らしい婆さんが聞けば、『小供が苦勞しまッさか

喜んでや
る。

長府君。

い、繼母は貰へません』と言つて笑つた。『亡くなつた御内儀さんが、草葉の蔭で喜んでやほるやろ』と、若い男が、生噛りの大坂辯を偽似て擲擲た。何にしても、風變りの、感心な男だ。車内は斯かる浮世噺で、大に賑ふ。

午後一時四十四分。長府驛に着いて下車した。宮崎君が、報知に接して、停車場に出迎へて呉れた。直に、打ち連れて、宮崎君の宅に往つた。宮崎君の父は、僕の父が、社で五年程世話した男である。二年前に、當地に歸つて、今は、郵便局長をしてゐる。律義な、親切な男だ。宮崎君は、其の長男で、僕とは、小學校時代から同級に居た、快活な男で、僕よりも蠻力ラであつたから、僕とは、非常に話が合ふ。

蠻力の
宮崎君。

毛利君。

夕方迄、宮崎君と、武士道實踐のことを談じ、入浴、晩食の後、曾て、陛下の行在所に宛てられた、毛利子爵邸や、毛利隆元の開基で、其の昔、大内義隆の自殺した、功山寺に詣で、後醍醐天皇の祈願せられたといふ、觀音寺の舊跡を見た。何しろ、一千余年前の古い堂宇で、古色蒼然、構造なども、

功山寺。

八月二十五日

三〇一

八月二十五日

三〇二

近世のものとは、大に趣きを異にしてゐる。

此の地は、狩野芳崖先生の出られた地で、遺墨が澤山ある。土地の名家には、曾て明治の元勳で朝鮮の公使であつた、陸軍少將梶山鼎介翁だの、同じく、明治の元勳として功名噴々たる、桂先生などがゐられて、何れも、功成り名遂げて身退き、此の山紫水明の故郷に隠退して、郷土の誘掖扶導に専念である。『明日は、此れ等の英雄傑士に紹介して遣るから』と非會つて貰へ』と、宮崎君父子は、頻りに留められたけれども、『最早、餘日が無いため、残念乍ら、此れ等諸元勳の風貌に接する好機を逸せねばならぬ。只、幸ひに、斯かる隠士に請ふて、断えず、生氣の満々たる田園の靈氣を、彼の腐敗せる穢土に向つて吹き送つて貰ふやうに、君等同志の盡力を願ふ』と話した。

○眞の傑士は潔白なものだ。何時迄も戀々として尸位素餐に甘んじ以つて秀才の進路を防護するのは心無い仕事である。〳

八月二十六日（月曜日）晴

壱の浦。

高麗海峡

午後五時五十一分發の一番で、下の關に向つた。宮崎君は、態々、僕を見送ると謂つて同乗した。汽車は、壱の浦の古戰場を左に見つゝ、進んで、午前六時二十分に、下の關に着いた。宮崎君の案内で、八幡山に登り、先づ、硯の海を下瞰した。前には、門司の棧橋が歴々として右往左往の人の數迄讀まれる。『海を距つる豊山呼べば應へんと欲す』とは能く言つてある。海に面せる山々には、石灰製造の工場が立ち並んで、煙突が林のやう。岸柳島は、其の下方から、右に亘つて横つて居る。左は、早鞆の海峡。中國と九州との岬が、互に相迫つて、潮流が急である。其の上には、檜の山の砲臺を筆頭に、無數の砲臺が、堅固に、皇國西門の鎖鑰となつてゐる。港内には、幾十百とも數知れぬ内外の軍艦、商船が、隙き間もない迄に碇泊して、盛んに黒煙を吐いてゐる。吁、此の盛況を一目東京

八月二十六日

三〇三

西門の鎖

八月二十七日

三〇四

春帆樓。

の友に見せて遣うたい。此處に來れば、世界の瀬戸内の關門としての豪壯な自然美と、火花の散るやうな活世界の人事美とが、如何にもよく調和して、「人は斯くあれかし」との大教訓を下してゐるのを感じずにはゐられない。八幡山を下り、二十七八年の役に構和使の會見した、春帆樓を瞥見し、薄墨の松に、安徳天皇を弔ひ、平家七將の墓に詣で、後、川卯といふ問屋に歸つたのが、午前八時半。

馬關出帆

宮崎君に別れを告げ、爲朝丸といふ汽船に乗り込み、いよいよ此の大港を解纜した。それが午前九時を少し過ぎてゐた。

壇の浦に出て、滿珠・干珠の二島に別れを惜み、愉快な瀬戸内の縦斷航海を始めた。

○人はよく自然とか人事とかいふ熟語を用ふ。人事亦自然界の一部なりと達觀することは出來ぬものによ。

八月二十七日（火曜日）晴

正午迄、日記など整理したり、遠近の景色を飽かず眺めたりして、船室と甲板とを往復してゐた。

神戸着。

午後四時迄午睡。覺むれば、船は岩屋の瀬戸を進んで居る。右には紀州の岩屋を望み、左には明石の白鷺城を眺め、舞子・須磨の白砂・青松を指し乍ら、午後五時、神戸に着。

豫定變更

僕の豫定は、此處から、汽車で大阪に向ひ、それから、坂鶴線で賤が岳の古戰場を弔ひ、敦賀に出て、富士見君に逢ひ、北越線で高岡に向ひ、伏木港に出て、日本海の怒濤を味ひ乍ら、直江津に着き、それから、汽車で長野に行き、村岡君と快談し、善光寺に詣で、信州の大陸的光景に浴し乍ら、輕井澤を経て、高崎に行き、上野行きに乗り換へて歸京する、といふ順序であつたが、途中、輿に乗じて、案外日子を費したことが多く、囊中も亦餘裕が無いので、いよいよ、東京の埃を吸ふべく、新橋行の急行列車を捕へることにした。

東京の埃

八月二十七日

三〇五

八月二十八日

三〇六

午後八時迄にはまだ三時間あるので、加藤旅館に上り、入浴、晩食、少憩の後、鐵道唱歌を逆に復習しつつ、新橋を指した。汽車は、夢を載せた僕、四百哩の道を只走り続ける。

○東京の埃が戀しくなつたものにはあらずや。

八月二十八日（水曜日）晴

美人の御

午前五時半。汽車は濱松を通つてゐる。旭日が豊に、天龍川の岸から顔を現はす。昨夜、名古屋附近で、美人の拘摸に靴を遣られたものがある。安城で、鐵道情死をしたものがある。相變らず、鼻の下の長い馬鹿者の多いことよ。しかし、斯る馬鹿者は、靴を取られたり、往生したりする方が、國家・社會の爲めだ。同車中、情死者は、一週間曝して後、犬に喰はせるものとす。といふ法律を作つたらば、猫狗主義の蔓延を幾分か豫防することが出来るだらう」と、蟹カラ風の書生が大に憤慨して居つ

猫狗主義

たのは、痛快であつた。

附京。

零時四十分。新橋着。帰宅したのが一時半。

竹坊の成長の著るしいのを始めとし、兩親・妹・女中などの健全な顔を見て、急に、自分は小供のやうになつて嬉しがつた。旅行中の僕は、全く、獨立自尊の一疋の男子であつたと氣が附いた。

○東京の埃の味如何。

八月二十九日（木曜日）晴

謝狀。

旅行中世話になつた人々に、謝狀を認め、郵便に附した。終日休養。夜は、僕の旅行談で、家中が大に賑つた。

八月三十日（金曜日）晴

電話交換

一軒置き隣りの水原といふ宅の二階の一室を借りて自炊してゐる

八月二十九日 八月三十日

三〇七

八月三十一日

三〇八

二人の女學生らしいものがある。今迄、何處の何學校に通つてゐるものか氣が附かなかつたが、今日始めて、妹から、本局通勤の電話交換手だといふことを聞いた。

「此の二人は、夏季休業中に蝦茶を引つ掛けて出歩いては、直に、腰辨だといふことが分るからと謂つて、休暇中だけは、袴を風呂敷に包み、猶、車掌に冷評されるからといふので、態々神田橋で電車を降りたり、日比谷迄乗り過したりするのだ」と、出入りの植木屋が噂してゐたといふ。

婦女子の虚榮心は斯く迄下劣なものか。何にしても、自己の職業と侮辱すること實に甚しいものだ。

○附り。自ら侮る者、誰か之れを尊崇せん。職業の尊榮は己にあり、職業は克く人の尊榮を致すものにあらざるなり。

八月三十一日（土曜日） 雨

近田の荒

今日、福翁百話の二度目を讀み了つた。

午後。近田の姉さんを訪問した。姉さんの寝れ方は一通りでない。若々しく脂切つてゐた頬の肉は落ち、漆のやうな、有り餘る自慢の頭髮も大變薄くなり、急に、十年も老いて見え出した。兄さんも、何だか活氣がない。心細い事だ。只、政男文は、益々快活である。「君。一番來い」と言つて、柔道を迫つたので、直に應じて、一二番闘つた。僕が勝つは勝つたけれども、政男君は、休暇中に、大變技が上つたやうだ。僕も、決して油断は出來ぬ。

夜、宮川君が尋ねて呉れて、旅行談が盛んであつた。宮川君は、僕の鳴戸談には、大に涎を流して聞き惚れた。八時半。宮川君は去つた。

「明日は、日曜ではあるし、幸ひに、乃公の都合も好いから、品川沖に、舟遊びをする積りだ。お前達も、連れて行かう」と、父の言葉に、僕よりも、妹は、手を拍つて喜んだ。

八月三十一日

三〇九

舟遊びの
騒成るの

九月一日

○近田の夫婦は互瘦せならん。

三二〇

九月一日（日曜日）曇後ち微雨あり

午前四時半起褥。冷水摩擦深呼吸二分間體操例の通り。妹は僕よりも先きに起きて、騒いでゐた。

午前六時三十五分。父と妹と僕と、三人打連れ、割引電車に乗つて、神田河岸元久衛門町の中村屋に住つた。『天氣は大丈夫かね』と、父が念を押せば『請け合ひです』と、若い者はいふ。『直くお召しなさいまし』と、お内儀さんのいふに、さらばと、直に乗り込んだ。神田川を下らうと、一町はかり出かけた頃、上つて来た荷船の報告によれば『今日は、兩國が通れない』。仕方がないから、南に廻つて堀り割に舟を入れた。此の邊は、幾度も通つて見た所だが、舟から見れば、兩岸の市街が大變珍しく感ぜられる。只、閉口したのは、肥料船が多いことであつた。『そんなに溢すなら、

舟遊。

肥料船大明神。

朝の景物一つ。

お前達だつて、斯んな臭いものを放らなければよいのだ。二百萬の厄介者が、毎日々々、間斷なく、斯んな不潔物を製造する以上は、肥料船が一日だつて東京に來なからうものならば、東京は糞の世界になつて終ふのだ。夫れを思へば、肥料船大明神ではないか』と、父上は笑はれた。寢坊する家では、今頃ポツ／＼雨戸を繰つて居る。新聞配達の鳴らす鈴の音のみは、何時何處にゐても、朝の景物の一つに、是れなくてはならぬものだ。

一望千里

段々下つて、窺河岸に出で、規模の宏大な土州侯の舊邸宅を見上げ乍ら、大河に出た。舟は投げるやうに、河口に向つて吐き出される。左顧右盼して、語り合ふ間に相生橋を潜り海に出た。一望千里、波は靜に、風穩かに、胸の底迄清々する。只、曇つてゐるので、薄寒いだけが缺點であつた。

妹は、毛布に括まつて黙つてゐる。右を望めば、品川の臺場を越えて、

九月一日

三二一

富士筑波

芙蓉峰の影が微かに、左を望めば、洲崎の松原を越えて、筑波山が小さく行儀よく横はつて居る。

一番網。

小鱸一尾

驟雨。

不意にさんぷと水玉が飛ぶ。見れば、舳に立つてゐた男は今日抑も
の一番網を入れたのであつた。一同氣息を凝らして、手繰る網の運命
を見て居る。鱸が一疋、勢鋭くボンと眺ね上つて、逃げて往つた。「チヨ
ッ。忌々しい」とは、漁夫の感慨のみではない。上げて了て見れば、三寸
許の小鱸が一疋、續いて十巾ばかり投げ込んだが、小鱸が四疋、小鯛が
六疋、烏賊の子が一疋、上つてきたばかり。けれども、後を後をと楽しんで、
無言の儘、三人共、大に水相を觀じて居る。「旦那。少し來た様です」と、船
頭のいふに、何が來たかと、頭を上げて見廻せば、南無三。一天墨を流し
たやう。やがて、大粒の雨が、ポツリと顔を打つた。「アッ」といふ間に、雨
脚は急に繁くなり、風さへ添ふて來たので、船の動搖も随分烈しい。妹
は、最も顔色を變へて、怖さうに震へてゐる。「直さ止みます」と船頭は平

二才の鱸

水母五つ
六つ。

並べ打ち

氣なもの。相變らず、右に左に船を操縦り、魂氣よく漁る。網を破つて
逃げ出したのが、二才の鱸で、随分大きなものであつた。けれども、網の中
にも、まだ夫れに劣らぬ大鱸が二疋居つたので、俄に元氣付て來た。
魚の粒が大きくなつたので、漁夫は、直に十八の網に取換へた。此の時、
氣が附いて見れば、舟は品川の台場を遠く離れてゐた。暫くして、風も
波も治まつた。しかし、五六度網を打つたのに對して、用も無い水母が
五つ六つ上つて來たばかりとは、心細い。
やがて、何處から來たか、五艘の網船、各二三人宛の客を乗せたもの
が集まつて來て、並べ打ちといふのを始めた。これは、船が舳を揃へて
横隊に進み、片端から、つるべ打ちに網を投げ込む方法で、随分勇ましい
ものである。やがて、正午に近づいたので、船は、各船列を脱して、晝食の
用意に取りかゝる。吾が船も、棹を淺洲に立て、舟を繋ぎ、六疋の鱸を
割いて、鹽焼煮肴などを作り、晝食をした。腹は減つてゐるし、魚は新鮮

九月一日

三一四

八珍大牢

であるし、其の味ひの美は、八珍大牢にも勝つて居た。

日に焼けた富士の肌

空が晴れるに連れて、遂に見える富士の高峰も、雲の衣を脱ぎ棄て、日に焼けた素膚を無遠慮に日に晒して居る。

寄せ打ちの壯観

誰が令するともなく、此處其處の網船は、又一同に纜を解いて集り、やがて寄せ打ちといふのを初めた。是れは、初め餌を投じて置いた一定の場所々々に、四方から包圍して、直破と云ふ時、一齊にバラ／＼と網を投げ込むといふ趣向で、其の壯観は又一段である。取れるわ／＼。此の舟にも、彼の舟にも、潑刺として、鯿や鰻が跳り込む。それが斜に映して来る日光を反射して、一種特別の美観を呈した。各船、歡呼の聲が一時に上る。此時、列に加はつた船は、無慮二十八艘。我が船で打つた網が二十巾。獲物には鱈八十二疋。鰹十八疋。鯛三疋。海鰒二疋。鮎一疋。それと、烏賊二疋であつた。

「暮れ船を返す」

彼れ是れする内に、夕陽は没して足許が暗くなり、汽船には紅緑の舷

燈が輝き、岸には電燈の光も青白く見えだしたので、水夫を急がせ船を漕ぎ戻した。

家に歸つたのは、午後八時。

○記事秘密といふの外なし。

九月二日（月曜日）晴

獲物分配

昨日の魚を、近隣に分配した。近田の兄さんの宅へも、車夫に持たせて、澤山贈つた。

互に無事を賀す

午前八時。久し振りで登校。同級一同無事。一人の缺員もないのは非常に嬉しかつた。旅行談、避暑談、歸省談など湧くやうである。

土産談

午前九時から、始業式があつた。式後、同級會を開いて、休暇中の土産話を聞くことにした。長野君の「戸隠登山」、山本君の「富士登山」、宮田君の「阿仁銅山の實況」、それに、僕の「武士道修業」は、共に大に歓迎せられた。

九月二日

三一五

九月三日 九月四日

三一六

路、父の注意もあつたので、澤田君と柴田君とを連れて歸り、大に御馳走をした。旅行中、特に世話になつたお禮である。午後四時、二君共に去つた。

入浴晩食の後、英語、漢文の下讀みをして、八時半に寝た。

○土産談の交換、其の消趣想ふべし。

九月三日 (火曜日) 曇後晴

二百十日

二百十日で、天候が何となく不穩であつたが、西南の暴風があつたばかりで無事に了つた。農家の歡喜想ふべきである。

○「二百十日無事」のみ記入して置いて欲しかりし。

九月四日 (水曜日) 晴

槍垣先生が大變危篤だと聞いた。「今度は助かるまい」と、中田が言へ

お悔み旁

坐ながらの旅行。

ば、「今迄よく保つたもの」と、福田判事殿君がいふ。何うしても、上方者は、冷刻で人が悪い。「何ね、福田君は槍垣先生とは關係が薄いからさ」と、伊澤君は、爲めに辯じて居る。「柴田君と添田君とは、我が級を代表して、更に見舞に往つて呉れ玉へ」と、一同が口を揃へて云へば、「もう少し待つて、弔詞を兼ねて往つた方が好い」と、又しても、福田君が言ふ。

何にしても、病氣はいやだ。病氣は、儘に、罪惡の甚しいものだ。

長野君が、甲州名所繪葉書を呉れた。僕は、それを見て、休暇中の清遊を思ひ出し、一種の快感に、暫し恍惚として居た。まだ見知らぬ土地を坐ながら旅行する趣味は、又格別だ。

放課後、公道館に廻つて、久し振りに、柔道を稽古した。

午後三時、歸宅。

夜、英語の下讀みをして、後、十五少年を三十頁程讀み、それにも飽いて、中學世界を讀み、九時に寝た。

九月四日

三一七

九月五日

○讀書漸く親べし。

三一八

九月五日（木曜日）曇

孫疾傳染

柴田、添田の二君から、楢垣先生見舞つた報告があつた。「大變衰弱して居られたが、まだ一週間は大丈夫であらう」とは、添田君の言。無遠慮な男だ。「しかし、先生よりも、先生の夫人が變だよ、今日も、枕を並べて床に就いてゐられたが、多分、傳染したものらしい」と、柴田君が言ひ足した。氣の毒だ。

又宿題。

圖書の時間に、宇野先生からまた宿題を仰せ付けられた。「初秋の夕を寫生せよ」といふのである。「弱つた々々々」と、異口同音先生は、前の楢垣先生とは正反對で、馬鹿に元氣が好い。不平をいはうが、何であらうが、お構ひなしに、ドシ／＼責め付けられる。何れも、不平を言ひ／＼、一生懸命になつて描き出したから、奇態だ。

根津權現に散歩。

正午放課。零時半歸宅。随分腹が減る。晝食後。竹坊を連れて、根津權現に遊びに行き、一時間許経つて歸つた。

鯉や金魚を要す。

午後四時。泉水の水を換へた。僕の旅行中、金魚が三疋死んで、七疋になつた。鯉は皆元氣だ。台所口の塵埃溜の下に、三分許りの蚯蚓の子が、ウヨ／＼する程出來て居たのを發見して、取つて來て、鯉や金魚を御馳走した。

端附。

行水をして、晩食を濟ませ、三十分間程涼み乍ら、父に旅行中の事を談し、後、幾何と漢文との下讀みをして、十五少年を二頁讀み、九時に寝た。
○無邪氣鞠すべし。平和愛すべし。

九月六日（金曜日）晴

學校の歸途、柔道に廻つた。

九月六日

三一九

九月七日

三二〇

桔梗女郎
花。蟋蟀。

妹が活けた、桔梗と女郎花との挿し分けが、一寸巧く出来てゐた。夜、塙根で、蟋蟀が鳴き出した。何だか物寂しい。

大阪の保造君から、繪葉書が來着。又旅行中の快味を思ひ出す。

○初秋を物寂しく観するは亡國の民なり。何ぞ飯の盃の激増を誇らざる。

九月七日（土曜日）曇

可憐の來

竹坊誕生
日の内

今日は、竹坊の誕生日であるから、放課を待ちかねて歸つた。父の好みで、竹坊の朋友たる、馨ちやん以下、近隣の子供を五人を呼んで、御馳走に蓄音機を聞かせ。思ふ様遊ばせ、バナ、菓子、ワップル、カステイラなどを饗し、珈琲を飲ませ、玩具の「サーベル」を、一本宛與へて後、紀念の撮影をして還した。一同大喜び。

夜は、近田の兄さん、牛込の叔母さん、實君、その外、父の友人三名を招い

て御馳走した。近田の姉さんは、病氣で來られなかつた。

満腔の同情。

近田の兄さんは、竊に僕を呼んで、斯ういはれた。「君。姉さんは、變に吉川のことを心配して居る。吉川が、まだ文通でもして、困らせるのではないか、機を見て姉さんに聞いて呉れないか。僕は姉さんの既往を尤めはしない。何處迄も同情を持つて居る。けれども、望みとあらば、姉さんとは絶縁しないものでもない。しかし、只、君とは何うしても、絶縁することが出来ぬ。僕は、君の氣象と人格とに對して、満腔の同情を持つてゐるから」と云つて僕の脊を叩いた。「僕も兄さんに對して、満腔の敬意を以つて居る」と答へた。眞に僕を解するものは、近田の兄さんであらう。

主人公は
白河夜舟。

兄さんが、席に復して、宴は更に振つたやうであつたが、主人公の竹坊は、疾の昔から、白河夜舟。僕もお先へ失禮して就褥。時に午後九時半。

○姉さんの不行跡君の爲めに寛假せらる。其の功や大なり。

九月七日

三二一

九月八日

三三三

九月八日（日曜日）晴東北の風強し

前四時二十分起褥。冷水浴深呼吸二分間體操例の通り。散歩して歸り、英語を暗誦。

前六時半食事。食後少憩の後、本週分の總復習を始め、午前九時に終る。

前九時。甲武線電車で、藤野君を訪問し、一時間餘り話して後十一時三十分、辭して歸る。途中、電車内で、山本君の妹富ちゃんに出逢つた。只、黙禮したばかり。

晝食の後、庭園の草を取りなどして、大掃除を行つた。

午後三時。宮川君が遊びに來たので、又例の旅行談。僕は、又々、武士道實踐の談。「極端に武士道を實踐しやうではないか」と勧誘した。宮川君は、勿論大賛成。

黙禮。

庭園大掃
除。
武士道實
踐の談。

常夏の盆
殺。

晩食後、妹を連れて、綠日を見に往つた。白い花の咲いて居る、常夏の鉢木を買つて來た。

十五少年を四頁讀み、九時に、寢た。

○少女と黙禮したことを何故に日記に留めたか。此の點問題なり。

九月九日（月曜日）曇

昔の今日は、九月九日望郷臺……「などと、文士墨客の洒落た日である。今は何でも無い。

妹の同級の矢部淑子ちゃんが、僕に英語を習ひたいと、妹を通じて、申し込んで來た桑原々々。

○淑子さんが醜態にあらざらば君も棄し。

九月十日（火曜日）曇

九月九日 九月十日

三三三

桑原々々

九月十日

三二四

幼女の乗りか

今朝、登校の途中、湯島五丁目で、囚徒を乗せた箱馬車が、五歳位の女の
兒を轢ひて、足を挫くいたといふので人の山を築たいてゐた。

佐々木君
腦貧血で
衰弱

學校で、三時間目の英語の譯讀が濟すみ、教室を出て行く時、佐々木君が、
急に持病の腦貧血を起して、石段の上に倒れ、前頭部を負傷した。傷は
随分深い。直に、風間君と僕とで、休養室に抱へ込み、寝台に載せ、校醫を
呼んで傷を縫ぬつて貰かつた。

槍垣先生
の計

第五時。地理教室に這入る前に、槍垣先生が大變に危篤だといふ電
話があつたことを聞いた。僕は、胸が噪ないだ。それは、俗に、「二つあるこ
とは三つある」といふから、今朝以來、既に、嫌いやなことを二回見た舉句あやうで、多
少氣に成つてゐたからである。「何、別に心配することは無いさ。槍垣
先生の危篤は度々だから。」と、松山君などは平氣であつたが、果然、教室
を出た時には、病死の電話があつた、と、給仕が言つたので、今更の様に、一
同騒さわぎ立つた。

弔文添削

六年級の窪田君は、直に、弔文の草稿を小出先生の處に持つて往つた。
『添削して下さい』と。今度は、小出先生も叱り飛ばす譯わけにも行かず、苦笑
しながら、黙讀して見て、「ふ、ふ。よく出来てゐる』と言はれたと、新井君が
噂うわさしてゐた。

病は罪惡
なり

全生徒を代表しては、窪田君と新井君とが、放課后訪問して、弔意を表
することゝした。僕は、僕々、遺族の方々の不幸を氣の毒に思ふと同時に、
病は罪惡なり』と、心中に繰くりり返した。

○然り病は罪惡なり。最も憐あはれ、べき罪惡なり。

九月十一日（水曜日）雨

槍垣先生
葬儀

午後四時。槍垣先生の葬儀があつた。各級から、四人宛選出して會
葬した。僕の級からは、山本、添田、柴田の三君と僕とが出た。雨の中を、
淺草の奥迄練あり歩あきには、一同閉口した。僕は、窪田君が弔文を朗讀す

九月十一日

三二五

九月十二日 九月十三日

三二六

る時と、今年四歳の先生の愛嬢が、顔は顔、是でない顔付きで焼香せられる時とには、意氣地なく涙が出て、顔が上らなかつた。嗚呼、病は罪惡なる哉。

○病は惡むべし。されど病人は憐むべし。古人も其の罪を惜んで其の人を惜ますといひしにあらすや。

九月十二日 (木曜日) 曇

何等の弱

五年級は、午後一時、品川の妙観山に小遠足。天高く馬肥ゆるの時、郊外の遠足、悪からう筈が無い。それでも、福岡君、中山君などは落伍したさうだ。何等の弱虫。

○實は腹痛がしたので。

九月十三日 (金曜日) 晴天

明日は遠足。

秋の郊

九月十四日 (土曜日) 晴天

今日は、常よりも早く起き、午前七時半迄に學校に出たが、驚いた、何時も遅刻する川村君さへも、もう来て居て、退屈顔に茫然してゐる。松山君や柴田君は、例の通り、鐵棒にかなりついて、得意の大和魂を大車輪に遣つてゐた。やがて、足利先生も來られた。

宮田君紛

前八時いよゝく出發した。山本君の指揮で御茶の水迄徒歩、それから、甲武線の電車に乗り込み、代々木で降りた。田舎の清淨な空氣を貪りながら、田の畦道傳ひに代々木の八幡に行つて、暫時休息。再び出發といふので、人員を檢査すると、一人足らぬ。誰かと思へば、便處に往つた筈の宮田君である。皆々大聲に呼んだけれども、歸つて來ない。先生が「馬ではあるまいし、小便すると謂つても、馬鹿に長過る。今一度見て來い」と言はれるので、一同笑ひ。其内に松林の中から、顔を眞赤にし

九月十四日

三二七

九月十四日

三二八

て駈て来たので、漸と安心した。糺して見れば、近衛兵の野外演習を見てゐたのだといふ。『相變らず呑氣な男だね』と、澤田君が冷評するので、一同又々大笑ひ。

栗拾ひ。
やがて、其處を出發、途中、植物や昆虫を採集しながら、代々幡村に來た。照會してあつた田舎家で、辨當を濟ませ、それから目的地の栗山に出かけ、栗を採つた。木が高いので、落すのが非常に困難であつた。皆々争つて登つてみるが、大概は中途から下りて來る。栗の木には登れぬものだ。其處には、小松の愛らしいのが澤山生えてゐたので、根引きにして、手巾に包み、色々の動物なども採集した。一同、手にく、思ひくのもをふら下げたり、捧げたりして、百鬼晝行といふ有様で歸途に就いた。代々木で散々待たされた後、漸く、御茶の水行の電車に乗り込んだ。野邊の景色も黒幕に包まれ、信號の燈火がギラ／＼と光を放つ。

飯五椀。空腹を忍んで、湯に往つて歸り、晩食に飯五椀。疲れたので八時に寢

百鬼晝行。

飯五椀。

た。

○罪もない世が麻痺されたことならん。

九月十五日（日曜日）晴天

今日は、昨日の勞れで、随分足が痛い。平凡な一日を過し、晩食后、英語の下讀みをして、十時に寢た。

○あの位で疲れるヤウでは武士道の實踐もあつたものでなし。

九月十六日（月曜日）曇天夜雨

晴雨が兎角定まらぬ。

去年の春迄共に學んだ、小學時代からの舊友で、目下伊豫の大洲にゐる、町田經之君から、令弟の遠逝を知らせて來た。而して、手紙の末に、左の言葉が書き添えてあつた。噫、氣丈の町田君も、愛弟を失つては、斯ん

思はず
泣き。

九月十五日 九月十六日

三二九

九月十七日

三三〇

な愚痴さへ溢すかと、僕は、思はず貰ひ泣きをした。

竹村續く野の寺の、芭蕉の陰に築かれし新塚。靈岳庵照居士と、墨痕鮮やかに散まるゝは何。是れは誰れ、永遠に眠れる、我が最愛の同胞の冷き紀念なりかし。

同胞は吾をや待つらん常闇の

黄泉の旅路の魘をして

折から、肌はだに浸しみるやうな初秋の風が、颯さつと縁側えんがわの葉蘭を撫なで、軒のきの風鈴かざりが、悲しげに鳴なつてゐる。

○舞臺掛りて出て来たな。

○死も亦罪惡にてはなきか。如何。

九月十七日（火曜日）雨

變カラ風
盛なり

長野君が兵隊靴を穿いて来た。奇は即ち奇だが、變カラ風が益々行はれ、變カラ黨が漸く勢力を逞たくまうして来たのは嬉しい。

○極端に走るべし。時計の振子を見よ。何時も行き過ぎては逆戻り、行き過ぎては逆戻り、斯くて其の活動は持続せらるゝなり。

九月十八日（水曜日）晴天

茶足に冷
飯草履

『をらがねや……』を振り廻はしては、時々、同級の者を笑はせる、例の阪本君、近來極端に變カラ主義を振り廻はして、尻の抜けた小倉服に、素足で冷飯草履を履はいてゐる。竹内先生は、これを見ても、只笑つて居られる。地歴の野田文學士先生は、今日も、不與ふきやう顔を、眉まゆを顰しかめて見て居られたが、遂に、『君、冷飯草履だけは廢せ。若しか、そんな亂暴な風が流行はり出したなら、風紀にも關係するから』と言はれた。僕は是れを聞いて、慙はからず不愉快を感じた。直に『先生。斯お様な風が流行はり出せば、帝國は萬歲ばんざいです』と、強く言つた。阪本君は、冷ひやかな顔付きで、黙もくつてゐる。すると、先生は、『若い者はすぐ極端を行き出すから困る』と言ひ捨て、去ら

風紀剛

九月十八日

三三一

九月十九日

三三二

冷飯草履
過止案通

れた。先生も随分、若い者の中では無いが知ら。しかし、『規律を紊るといふ口實から、僕等の主義の發展を沮喪せしめるやうな事になつても困るから』といふので、『それでは、冷飯草履だけは廢して、其の代り、靴と名の付く限りは、何んな靴でも穿いて來やう』と約束した。一同大賛成。
○極端迄往つて後戻りせよ。始めより中庸を欲せば竟に及ばずして止むものなり。

九月十九日（木曜日）

冷水浴仲
間。

修身の時間に、竹内先生が引き續き冷水浴を遣つて居るものを調査せられた。所が、夏以來、大騒ぎをして始めて居た者が、八分通りは皆中絶。竹内先生は、大に、其の薄志弱行を責められた。引き續いて遣つてゐる者は、添田・澤田・山本・風間・宮川・中田の六君と僕とのみであつた。級長の柴田君は、『遣つて居る』と稱して居たけれども、近處に居る平沼君に

化の皮。

素破抜かれて、化の皮が剥がれた。僕は、今日迄、柴田君を信用して居たけれども、向後は決して信用せぬ積りだ。武士道は信義を重しとする。殊に、其非を掩はんが爲めに師を欺くなどは、言語同斷、沙汰の限りである。これから思ひ合せば、何時も、表面は熱心らしいことを言つて居乍ら、學友の爲になるやうな仕事は案外せぬやうだ。機を見て、大に忠告を試みて遣らう。

○正直は最良の政策なり。

九月二十日（金曜日）曇

警戒々

午前五時二十分前起褥。近來、多少、晏起の癖が出来かけた。警戒々々。

紙幣拾五圓。

食事前、本郷通を散歩して居て、紙沙包を拾ひ、直に、交番に届けた。巡查が披いて見たれば、紙幣が七十五圓あつた。

九月二十日

三三三

高田君忠
音を容る
らす

悲慘。

姉さん
三個月

眞面目に
姉さんと
談る。

九月二十日

三四

三時間目の休憩時間に、第一回の卒業生の記念樹の下に、柴田君が一人立つて居るのを見て、駈けつけて往つて、武士道違反を詰責し忠告した。すると、案外快くそれを聴き容れて呉れ、「將來、一層注意するから」と言つて、二三度、「有り難う」と禮を述べた。

故槍垣先生の夫人が危篤だとの報を聞いた、悲慘の極だ。放課後、柔道に廻り午後三時帰宅。

近田の姉さんが妊娠三ヶ月だといふことを、今日始めて聞いた。道理で、近來、「ヒステリー」的であつたのだなと、心附く。

晩食後、お歡びに往つた。兄さんは不在。姉さんに逢つて、先日の兄さんからの言葉を竊に打ち明けた。姉さんは、吉川から度々迫害を受けた事を話して後、「近頃、眞實に、父母の家庭に居る時に異性と無遠慮な交際をしたことの非を悟りました」との感慨を口切りに、男女同權論を夢みたことの懺悔やら、兩親の慈愛に忤れて、自由結婚など主張したこ

生れて始
めて。

との悔悟やらを繰り返して談された。兄さんの素行も、近來、極めて嚴格で、且つ、姉さんに對する言葉や態度も、餘程親切で、物優しくなつたと云ふことを談り、「是れも、秀さんのお蔭です。それに、姉さんは、只、秀さんに心配ばかりさせて居て、濟みません」と、涙乍ら浸々言はれた。僕は、姉さんから、斯んなしんみりした言葉を聞かされたのは、生れて以來、始めていあつた。

午後八時に辭して歸り、會話の宿題を暗記して、九時に寝た。

○姉女子は生涯懺悔せざるもの多し。故に多くは煩悶を墓場迄背負つて行くなり。姉さんなるもの幸にして懺悔の大勇氣を失はず。將來の幸運期して待つべきか。

九月二十一日 (土曜日)

父の自慢の尾長鶏の一番が、さも楽しげに、秋風に尾羽を戦がせてゐ

九月二十一日

三五

雌雄淘汰

る。妹は、その牡を指して、『兄さん。あの牝の方の羽色が、此の節は、引つた、ないのね』と云ふ。『え(？)。あの右側の(？)。千里さん。あれは牡だよ。千里さんは、今迄、鶏の牝牡を見分けることを知らなかつたの(？)』『知つて、よ。あのお化粧した方が牝ですわ』僕は、笑止しくなつて、思はず吹き出すと、妹は、猶真面目に、『ねえ、さうでせう。あの孔雀を御覽なさいね。あれだつて、牝はあんなに綺麗ぢやありませんか』それがやつぱり反對だ。總べて、何んな動物でも、雌は少しも飾りがなくつて、雄には、大概、飾りがあるのだ。妹は、少し疑ひ始めたけれども、まだ承知しない。『それなら、兄さん。尾の長いあの綺麗な方が雄ならば、何故、あんな美しい聲で唱歌するのでせう(？)』鶏に限つたことにはない。何んな動物でも、雄は、美しい聲を出す、雌は、黙つて居るものさ。夏の蟬でも、又、今頃盛に鳴てゐる、松虫、鈴虫、蠶虫、蟋蟀などでも、あんな美しい聲を出して鳴くのは、みんな雄だよ。『怪しいのね。だつて、人間を御覽なさい。女の

方が、身装も立派にするし、お化粧もするし、美しい聲で歌も謡ふぢやありませんか。』そりや、人間だけは別だ。『何故。々々』それは、雌雄淘汰の理法から起る必然の傾向だ』と、五月蠅くなつたから、難しい熟語を浴せかけると、『雌雄淘汰つて何。(？)』と、猶切り込んで来る。『それぢや、言ふまいと思つたけれども、思ひ切つて言つて聞かせやう。其の代り、美しいものがあつたら、兄さんに献納するのだよ。好いかい。雄雌淘汰とは斯うだ。雌の少ない動物は、雌が威張つて居て、澤山の雄の中から、自分の好きなものを勝手に選り取りをする、だから、選られる方の雄仲間、色や聲やを、出来るだけ美しくすることを競走して、雌に好かれやうとするか、又は、體力を強くして、自分の競走者を負かさうとするのさ。多くの動物は、みなそれなのさ。處が、人には、案外雌の方が多し。それは、雌は、戦争にも出ないし、危険な仕事もしないから、自然、死ぬる事が少ないからだ。それで、雌は、いつも、有り餘つてゐて、その中から、雄は自分の好

九月二十一日

三三八

きなものを選び取り取りする事が出来るのだ。それを選ぶ時には、成る可く、形や色や聲などの美しいものを取る。だから、雌は、白粉を塗つたり。紅をさしたり、華美な服装をしたり、樂器を使ふ稽古をしたりするのさ。『オ、嫌あだ』たつて、眞實だよ。だがね、千里さん。近頃は、人が賢くなつて、同じ雌を選ぶにしても、他の動物のやうに、たゞ、形や色や聲ばかりを標準にしないで、だん／＼、品行やら、學藝やらも考へるやうになつて來たのだよ。それで、千里さんなども、品行や學藝などをよく氣をつけねば、人の雄に見限られるよ。『いゝわ、あたし、人の雄なんか大嫌ひよ、』『ぢやお嫁に行かないの』『嫌あだ』『さあ、なにか美味いものをお呉れ。』『嫌やですよ。そんな出鱈目をさかさされたお駄賃など』。

○北米合衆國には女子の數男子に比して極めて夥し。是れ女尊男卑の國風を馴致したる所以なりと附説せよ。

九月二十二日（日曜日）曇夜晴

目覺し時計に起され、午前四時に床を出た。冷水浴深呼吸二分間體操、例の通り。

體操をやつて後、庭を散歩して居ると、大きな鼠が、隣家に向つて垣根を傳つて居るのを見た。直様、小石を拾つて投げ附けたが、二尺も外れて、鼠は一目散。『朝鮮人ですら、石を巧に投げると云ふものを、僕は、野球の「ピッチャー」であり乍ら何たる意氣地のないことであらふ』と、妙な處に憤慨したので、『是れは面白い。斷じて、石投げの妙手になつて見やう』と思ひ立つ。

午前五時から、前週分の總復習を始めた。
午前六時半、朝食。食後、又、總復習の續きを始め、午前十時に終つた。
復習の後、竹坊を遊ばせる傍、ピンポンの球を持つて來て、板塀に的を

九月二十二日

三三九

鼠を逸せし
恨み。

投石に志す。

早速復習。

九月二十二日

三四〇

貼りつけ、一問口位から投げた。十發の中、六發か七發は命中するが、二三發は屹度外れる。不可いものだ。

競泳を見
〇〇新聞社の催にかゝる競泳が、今日、隅田川で舉行される筈であるから、零時半から、宮川君を誘つて出掛けた。僕等は、新大橋際、安宅町河岸の決勝點を選んで、其處から見物したため、殊に面白かつた。全國中から選出された、二十名の選手中には、女も二三名居た様であつたが、物にならなかつた。此の冷氣に向つて、多少季節外れの感はあるけれども、僕等は、結局、この冷氣に應せぬ選手連の意氣の壯なことがうれしかつた。

午後三時歸宅。

不倦不
夜、英語の下讀みをして後、十五青年を讀んだ、少しづつでも、急がず歇まずに遣つて行けば、恐しいものだ。早も、半以上をよみ了つた。
午後九時就寢。

〇投石に志す。青年者の氣紛れに了らざるは幸なり。

九月二十三日 (月曜日) 晴

長府通
信。

山口縣豊浦郡長府の宮崎君からの通信に、「武士道の實踐といふことは、大に先輩の同情を得た。不言實行的に、大に奮勵しやうではないか」と書き添へてあつた。愉快々々。

中秋。
今夜は中秋。夕方から雲が散じて、皎々たる玉兔が隈なく下界を照してゐる。

〇明月の詩を誦せん哉。

九月二十四日 (火曜日) 晴

山本君から、米國評論の評論を借りて来て、繪だけ見る。

〇如何なる諷刺をや得し。

九月二十三日 九月二十四日

三四一

評論の評
論。

九月二十五日 九月二十六日

三四二

九月二十五日（水曜日）晴

大氣焰。

学校の歸路、竹内先生のお宅に遊びに行き、青年武士道團に就いて大氣焰を吐く。

○怪氣焰ならずんば幸甚。

九月二十六日（木曜日）曇

今朝も、二十分程、球投げを練習した。

幾度やつて見ても、十の中三つ四つは外れる。殊に、力を入れる程外れるやうだ。

英國生徒の圖書成績。

學校で、圖書の宇野先生に、英國中學程度の學校生徒の圖書の成績品を、二十枚ばかり、見せて貰つた。多くは、寫生である。技術は、僕等より勝つては居らぬと思ふけれども、觀察が正確で、思想が緻密で、描寫が何

武士道實踐家。

處迄も眞面目であることは、何うしても、まだ、日本人は及ばぬと思つた。僕の級には、段々、武士道實踐黨が多くなつた。級中第一の金満家の、長野君迄が、近頃は、貴公子然たる、メルトン服を廢して、小倉服を着けて来るやうになつた。

○變カラ即武士道實踐とはナト危險な見解ならずや。

九月二十七日（金曜日）晴

井上君の麵麩を喰ふ。

今日、第五時地理の時間中に、井上君が、麵麩を喰つてゐて、野田先生に見付けられ、散々小言を聞かされた。厄介な男だ。『制裁を加へて遣らうか』と、柴田君が言ふ。けれども、『先生に知られないで、僕等が発見した時ならば、竊に制裁を加へて遣るのだが、既に、先生に知られて、散々齋を取られたものを、撲る必要は無い』と、僕は不賛成を唱へた。柴田君は、何

九月二十七日

三四三

九月二十七日

三四四

か言ひ争はうとしたが、何う思つたか、中止した。

学校の歸路、柔道に廻つて、三時過ぎに歸宅した。

村岡君來信

長野市の村岡君から、長い手紙が着いた。『君が來たらば、共に、戸隠の

鹿外の靈氣

登山を試みやうと、折角樂みにしたことが、當て外れとなつて、無上の遺憾である。君は、何時も、海の美觀を主張するが、巍々として雲上に聳え立つ高山に登り、塵外の靈氣を呼吸して、蓋爾たる下界を見下した時の氣持ちを、是非、君に味はせたい』と切り出して、其の後に、戸隠淺間などの登山紀行を添へ、最後に、最近の旅行日記の一節、榛名登山のことをも誌してあつた。

榛名登山

『八月二十八日午前五時。伊香保の宿舍を立つて、榛名に向ふ。快き朝雲を踏み分けて進むこと八町餘。道は、爪先上りとなる。願れば、今しも、旭日は、徐々に赤城の山を離れて、日頃の猛威を示さんと微笑む。蟬の聲漸くに亂れ立ちて、聞くからに、今日の暑さを想はしむ。更に進むこと五町。道漸

く險なり。足下に起る霧流の響き、峰の松風と相呼應し、谷間には時ならぬ鶯の聲も登えて、深山の氣漸くに身邊を襲ひ來る。やがて、渺たる榛名湖は、眼前に開展せられ、倒に、榛名富士を映じて、湖面靜に、鯉を漁る小舟の影三つ四つ二つ、彼方此方に點々たる機、蓋も及ばじ。湖畔の一茶亭に憩ひて、涼を食り、勇を鼓して、更に登ること三十二町。漸く榛名神社に着す。深山の奥の社殿の光景は、何時も乍ら、壯嚴にして、思はず、讚を正さしむと。……』
村岡君のこと故定めし、面白い「スケッチ」やら、珍奇な植物の採集やら、思ふ様の獲物を携へて歸つたことであらう。

何時もして見たいものは旅行だ。直に、返事を認めて出した。

○旅行は面白し。紀行を読むは腹の減らぬ旅行にして更に面白し。

九月二十八日（土曜日）晴

明日、竹坊と妹とを連れて、淺草公園に遊ぶ筈。二人共狂喜してゐる。

九月二十八日

三四五

淺草行豫定

九月二十九日

○此の夜玉乗りの夢圓なり。

三四六

九月二十九日（日曜日）晴

球投げ練習改良

午前四時起床。冷水浴深呼吸二分體操、常の通り。球投げの呼吸が少し解つたので、今日は、二間口から投げた。「ピンポン」の球では金が要るから、今日から、小石に改め、的の後は古蚊帳の切れを張り、標的には、手毬を吊した。

前週中の課業の總複習全部を終つたのが、午前八時半。

淺草公園散步

午前九時から、妹と竹坊とを連れて、淺草公園に遊びに出かけた。日曜で、天氣がよくて、此の氣候であるから、電車の雑沓は非常だ。雷門から這入つて、鳩に豆を遣る。竹坊は、大喜びで、何時迄も動かぬ。漸くに促して、裏に廻はり、噴水を見せ、それから、花屋敷で、山雀の曲藝など見せてやり、玉乗りの前に來た。妹が竊かに指す方を見れば、何時か神田明

見覚えのある青年

神の境内で、散々膏を取つてやつた男が、一人の、「ハイカラ」娘と、何やら談笑し乍ら、手を引き合つて通る。果して墮落青年なのだ。僕は、竹坊を妹に託して置き、つと進んで、其の前に立ち塞がつた。僕の顔を見たその青年の驚き方は、非常であつた。直に、視線を轉じて、何やら小聲で連れの娘に私語さ乍ら、急に歩を轉じて、僕の視域を脱れやうとした。「馬鹿ッ」と、強い低い聲で罵しつて遣ると、妹は、惶て、「お止しなさい」と止めた。二人は、後をも見ずに、さつさと往つて了つた。「自ら求めて、廣い天下を狭くする奴」とは、斯んな馬鹿者をいふのだ。

好物の甘酒

活動寫真を見て、竹坊の好物の甘酒屋に寄つて、それから、玩具の電車を買つて遣り、本物の電車に乗つて、歸つたのが午後一時。

非武士的小人

晝食をして、少し休んで後、地圖を描いてゐると、宮川君が遊びに來た。宮川君は、「柴田は隠險な男だ。よく君の蔭口を言つて居るよ。僕が、君と同席の時に、其の面皮を引剝して見せやうとか」と言つた。「何時、僕の

九月二十九日

三四七

九月三十日

三四八

悪口を言つたのか』と聞けば、『現に、昨日も言つてゐた』といふ。彼の男、僕の忠告を眞面目らしく聞いてゐたのも、全く虚偽であつたと見える。非武士道的の度し難い男だ。

他國を描く。

午後四時。宮川君は歸つて往つた。再び地圖を描く。

午後五時。入浴。六時半。晩食。食後、父の使ひで、神田に往つて歸り、一時間程、十五少年を讀み、八時半に寝た。

○竊に人を誹ること勿れ。又己れに向つて他人を誹るものを警戒せよ。彼れは復必ず他人に向つて吾を誹るものなればなり。

九月三十日 (月曜日) 晴

檜垣先生夫人逝く。

故檜垣先生の夫人が、昨夜午前三時頃、永眠せられたとの報があつた。後には、御老母と、當年四歳の遺兒とがある。何うなることかと、實にお氣の毒に思ふ。

放課後、柔道に廻つて、午後四時歸宅。

○人の不幸も斯く極端に来ては愛想も何も盡きはてるものなり。

十月一日 (火曜日) 晴

今日から、學校は、午前九時始業となる。今朝は、例に依つて、四時に起きたれど、明朝から、五時に起きる事に定め、日常寢起起居の時間割を改正した。

寢起起居の時間割を改正。

今朝は、石投げが大變巧く往つた。二間口で、例の手毬を的として、三十發の中、只五個外れたのみであつた。命中する石は、故意に力を入れずして、自然に力の籠つたものにあるやうだ。又毬を吊す紐は、長い方が、振動が鈍くて好い。

石投げの進歩の跡を見。

午前八時半、登校。故檜垣先生の遺族に贈る爲め、生徒一同から、一人につき五錢以上の贖金をすることにした。僕の級は、柴田君と添田君

十月一日

三四九

高田君に
面當て。

十一月一日

三五〇

とが集金することになつたが、柴田君は、『書生の身分で、斯んなことに氣張る必要は無いから、恰度五錢宛出せば好いではないか』といふ。僕は、『日々、蠶カラに甘んじて、冗費を節する所以は、斯んな時に惜し氣なく出す爲めではないか。競争して、一厘でも多く出すが好い』と主張した。宮川君、澤田君、山本君など、口を揃へて僕に賛成して呉れたので、大に力を得た。福田判事君は、『僕は、諸君よりは關係が薄いのやさかい、半額にして、貳錢五厘以上といふことにして貰ひませ』といふ。何事でも茶化す男だ。長野君は、即席に貳圓、藤野君は壹圓出したが、後は、貳拾錢拾錢が多い。持ち合はさないものは、明日持つて来る筈。

夜、漢文を下讀みして、後、中學世界十五少年などを讀み、九時半就寝。

○面當ては非武士道的なり。正々の旗堂々の陣君子らしく争ふべし。誰か之れを宋襄の仁と嘲らんや。

十月二日（水曜日）晴

統計拾七
圓。高田君の
減す口。

故槍垣先生の遺族に贈る醜金は、僕等の級では、總計拾七圓出來た。他の級では、八九圓から、多くて拾圓位のものであつた。柴田君は、それを大變誇つて、他の級の級長等に向ひ、『君等は、もう少し盡力して貰いたいのう。僕の級は、學校中での蠶カラ黨だけれど、出すべき時には、此の通りぢや。』など大言してゐた。且つ、僕に向つては、『僕は、勿論、始めから君と同感であつたが、君等を憤慨せしめる爲めに、故意と反對のことを言ひ出したのぢや』と言つて笑つた。これが事實とすれば、小策を弄して、人を小馬鹿にしてゐる。若し、事實でないとすれば、表面を糊塗した言ひ前で、非武士道的だ。

午後三時。學校の歸途、柔道に廻はつて、五時半に歸宅。

○人は反感を持つて見れば、其の一舉一動悉く癪に障るものなり。然れ

十月二日

三五二

十月三日

ども君子は則ち然らず。

三五二

十月三日 (木曜日) 晴

緑日の野
生主義者

午後七時。父の使ひで、牛込の叔母の宅に行き、歸路、神樂坂を通つて見れば、恰度緑日で、大變な人出。相變らず、自然主義、野生主義、禽獸主義の青年男女が、何物かを求めるやうな、眼付きの落ち着かぬ顔で、右往左往に徘徊してゐる。取り分け、白粉を塗つた書生が、香水に身を浸して、目尻を垂し、女の後を追ひ廻はつてゐるのを見ると、何だか情なく、泣き出したい位だ。僕は、腹癒の爲めに、斯の種の男二人の横ッ腹に、思ふ様衝突して遣つた。三人目の一人に、脇鐵砲を喰はせて遣つたれば、生意氣にも、尤も立てしたので、力任せに投げ付けて置いて、人を潜つて逃げて來た。亂暴だとは思つても、折々、僕は、此の病を起して困る。『病は罪惡なり』とは、僕の主張であるが、是れも一つの罪惡か知ら。

僕の持
病

○勿論それも一つの罪惡と心得ふべし。但し情狀を酌量して刑は一等を減ぜらるべし。

十月四日 (金曜日) 雨午後晴

石投げ不
成績

前五時に起き、例の冷水浴、深呼吸二分間體操など遣つて後、石投げを練習した。成績が、昨日より悪い。昨日は、三十發の中で、只二發失した。いけであつたが、今日は、二十一發命中した。いけである。何う考へても、退歩の理由が判らぬ。幾度反覆しても、反覆すればするだけ中らぬ。中らねば中らぬだけ氣が焦れる。焦れば焦れだけ、猶中らぬ。斯なものでも、虚心平氣、無我無心でなければ、畫餅だと思ふ。

焦れば焦
中らぬだけ

食事前に、英語の下讀みを、一週分程した。

學校で、第四時簿記の時間に、田所先生が、餘り熱心に説明して居られた爲め、教壇を踏み外して、バケツの中に左足を突込まれた。例の福田

バケツの
餘興

十月四日

三五三

十月五日

三五四

判事君堪らずキユツと言つて笑つたので、一同アツと噴き出して丁つた。先生は、只苦笑して居られたが、氣の毒であつた。

放課後。例に依つて、柔道に廻はり、五時に歸つた。

晩食の時に、林檎の皮を取つてゐて、ナイフで、左の示指を傷けた。直に食鹽を振り掛けて、糊帶して置いた。

○食鹽消毒的で面白し。併し鹽に有效なり。白砂糖を用ふるは少し甘い遣り口なれども是亦同様に有效にして其の結果石炭酸・硼酸水に優る萬々。

十月五日（土曜日）雨夕方より暴風

今朝、石投げの成績が、昨日よりも悪かつた。繰り返し繰り返し、三十分間程試みたけれども、演れば演るだけ不成績である。不愉快此上なし。

石投げ又
繰り不成

制欲の修
養

学校の放課後、學級會を開いた。從來、學級會には、會費を拾錢出して、菓子喰つたけれども、今度からは、それを半減して、五錢宛醸出し、菓子を廢して、全部貯金して置き、何か有益のことに使用することゝした。

制慾の修業には、此の位の事は演る方が好い。野球のこと、柔道のことなど、色々協議した後、宮川君から、『武士道の精神に違反して、級の體面を汚す者がありはしないか。ないと思ふ人は、白紙を出し、若し、あると思ふならば、其の人名と、其の事實とを併記して、無記名で投票し、それを委員に附托して、調査した上、その者に警告を與へ、猶止まぬならば、制裁を加へることにしては、何うか』といふ、長つたらしい建議があり、松山君以下、多數の賛成者もあつたけれども、採決の際、僅かに一人の差で、否決された。『實行すれば面白いがな』と、小聲に、宮川君がいふ。『喧嘩の種になる』と、山本君は言つてゐた。

無記名投票
の建議
否決

妹の奇
問

歸宅後、妹に、英語の不審を教へた時、妹は、突然、『兄さん。"Sweet heart..."

十月五日

三五五

十月六日

三五六

ッて何のこと(?)』と聞いた。『何處にあつた』と反問すれば、『皆さんで、左様いふのです。何か怪しな事ぢく無くつて(?)』といふから、『墮落生の使ふ言葉です』と吐き出すやうに言つて遣つた。近來、女書生が淑徳を守らぬやうになつたこと夥しい。

○無記名投票の方法は女のするものなり。弱い女のするものなり。

十月六日 (日曜日) 暴風雨

暴風雨。

夜來の暴風雨は、一通りで無い。"Bucketful rain"とは、斯んなのをいふのであらう』それに、猛烈な東北の風が加はつたのであるから、天地も劈かれるばかり、實を白状すれば、僕は、斯かる光景が大好きである。利害の關係を離れて考へれば、天變地異程、壯烈な、小氣味の好いものはない。しかし、夜半、座敷の雨漏りに驚かされて、金盞を持ち出したり、朝見れば、塙根が見る影もなく打ち倒されたり、新聞が來なかつたり、洪水山

小氣味の
よい天變の
地異

崩れの噂が頻々と傳へられたり、外出が出来ぬ上に、勉強が出来なかつたりしたのは、甚なからず閉口した。

午後一時頃、嵐は全く止まつたけれども、雨はまだ降つてゐた。

○天變地異が小氣味よしとは物騒千萬なる男と謂つべし。されど余は此の無遠慮なる告白を愛す。

十月七日 (月曜日) 晴

學校の應
急手當。

學校に往つて見れば、紀念樹が根から吹き倒され、藤棚が押し潰され、硝子戸が五枚ばかり吹き外されて粉微塵となり、瓦が一坪程吹き剝がされ、柵が十四間程倒れてゐた。思ふ様荒されたものだ。午の時間に、綱引の綱を取り出し、紀念樹を引き起して培つて置き、放課後、生徒がそれト手分をして、應急の修繕工事を行つた。校長が大變喜んでゐられたのは、嬉しかつた。其の爲め、今日は柔道を休んだ。

十月七日

三五七

靴を盗ま

十月八日

三五八

父の靴を盗られた。屹度屑屋だらう。佛蘭西革の上等の新調した許りのものであつた。

○健児が力を協はせて風害の應急修繕。愉快な園なり。

十月八日 (火曜日) 晴

庭園の掃

筆の汚

午前四時半に起き、冷水摩擦をして後、父上を手傳つて、庭園の修繕掃除をした。石投げの稽古などは見合はせて登校。

今日は誌すも筆の汚れるやうな忌々しい出事があつた。それは、僕が夜代数の宿題を解いてゐると、妹が、一封の手紙を持つて来て、「これを、四年の星野さんが、兄さんに上げて、是非お返事を貰つて来て下さい」と言つて出した。星野といふのは、時々、妹が連れて歸る、ハイカラ娘である。僕は、何氣なく披いて見て、驚き且つ呆れた。「命にかけて……」とか、「满腔の熱情……」とか、縷々數百の醜文字——僕は、其内容に依て、敢

て醜文字といふ——が陳列してあつた。僕は、散々妹を叱つた后、左の返事を書いて渡した。

○是非返事をせよとのこと故妹に免じて、止むを得ず、敢て答ふ。將來、斯かる破廉耻のことを慎しみ給へ。然らずば、君の兩親、並に、學校に通告すべし。君若し僕を恨みて、直接間接を問はず、妹を迫害するが如き事あらば、悔ゆとも及ばざる辛き目を見らるへし。妄言多罪。

妹の行末を憂ふ。

呵、斯かる仲間の中に立ち交つて、其の醜的言行を見聞する、妹の行く末が思ひ遣られる。般鑑遠からず。現に姉さんの例がある。困つたものだ。

○斯かる非禮を加へられたる時は只黙して答へざるを可とす。
○妹を庇護する用意周到と謂ふべし。

十月九日 (水曜日) 雨

十月九日

三五九

練習なるもの功
果を疑ふ

朋友信あり

天下の大
事變

健氣の決
心

十月九日

三六〇

午前五時起牕。今日も冷水浴や深呼吸や二分間體操の後石投げを練習した。相變らず不成績で殆んど始めて試みた當日程も命中せぬ。僕は練習なるものの効果を疑ふ。

柴田君が「藤野君が無届欠席をした」といふ。藤野に限つて無届欠席をする筈が無い。屹度行き違ひでもあつたのであらう」と僕が辯護してゐると、果して午後二時に郵便で欠席届が出た。

學校から歸つて見れば藤野君から左の文面の郵書が來てゐた。

愛する友よ。余は悲しき出來事に遭遇して殆んど失神せり。余は今朝執達吏に襲はれ始めて父が經濟界の激變によりて終に破産の悲境に陥り、法律の制裁を受くるに至りしことを知れり。愛する友よ。余は今日より乞丐よりも貧しき人の仲間に入れり。余は再び東華中學校の教室に於て君と手を執り大義を談するの秋を見る能はざるべし。されど友よ。驚く勿れ。是れ全く余の運命なり。友よ、又悲む勿れ。余は猶來るべき千辛萬苦と戦ひ全力を擧げて父の悲運を挽回せすば止まざるべし。幸に安ん

ぜよ。

僕は此事を父母に談り共に心を痛めた。

○君子固より究す。究して後始めて其の君子たるを見る。

○其友は之を貧時に求めよ。管鮑の交りはこれを措いて他に求むべからず。

十月十日 (木曜日) 雨

落膽

今朝も石投げが不成績であつた爲め不愉快に堪へられぬ。人には夫れく天稟があつて人力で如何ともすべからざるものである。それ故何事でも練習に練習を重ねさへすれば屹度習熟するものだとは云はれぬ。されば僕の如きは如何にしても石投げの名人などにはなれぬかも知れぬ。

雨が降るので電車に乗つて登校した。處が其電車の中で飛んだ災

飛んだ災
難

十月十日

三六一

難に出喰した。年の頃三十前後の職人風をした拘摸が紳士風の男の時計を拘らうとしてゐたのを、偶然僕が発見したから、僕は猶豫もなく、件の男の足を蹴つた上、思ひ切り、睨めつけて遣つた迄はよかつたけれども、間もなく、其の男は僕をして、其の紳士の上に倒した。僕は驚いて起き直り、紳士に謝した後、『拘摸を引つ捕へて遣らう』と思ふ暇に、拘摸は、ズン／＼人を分けて出て行き、電車から飛び降りて了つた。紳士は、急に氣が付いたらしく、『ポケットを探つて見て、『時計が無い』と騒ぎ出した。而して、紳士は、頻りに僕を疑ひ出した。それが、金時計であつたといふので、騒ぎは段々甚しくなる。電車は停る。巡査が来る。僕が辯解をすればするだけ、紳士も巡査も僕を疑ふ。巡査は、紳士と僕とに、『降りよ』といふ。紳士は、車掌台迄降りたが、僕は降りぬ。僕は、腹立ち紛れに、『そんな間抜けだから、拘摸などに見込まれるのだ』と、嘲つてやつた。巡査は、再三、僕に、『降りよ』と促したけれども、僕は、何うしても降りぬ。『降りる

金時計が無い

後悔する

鳥は飛んだ後

その服装では

必要は無』と言つた。巡査は、更に、住所氏名を訊問する。『いふ限りで無い』と頑張る。電車は、四臺五臺と停滞して来る。乗客は、『早く出せ』と車掌に迫る。僕は、最後に、斯う言つた。『僕の住所氏名をそれ程聞きたくれば、言はんでもないが、その代り、是れでも、僕は名譽を重んずるから、若しも、僕の潔白を證明した後、その儘に濟まさないぞ。後悔するな』と、而して、巡査と紳士とを等分に睨め付けて、返事を待つた。二人とも、此の権幕には、少しく避易した。此の時迄黙つて笑つてゐた、一人の白髯を蓄へた品のよい老人が、靜かに口を開いて、僕の辯護をして、僕を證明して呉れた。『鳥は飛んだ後だよ。馬鹿々々しい』と言ひ添へた。すると、三四人、聲を揃へて、これに同ずるものが出来た。紳士と巡査とは、降りて往つた。電車は、全速力で駆け出した。僕が老人に禮をいひ、名を聞くと、老人は、只笑つてゐる。而して、頻りに僕を慰めて呉れた。學校に往つても、談は、此の出来事で持ち切りであつた。『その服装で

十月十一日

三六四

は、拘摸と間違へられるのが寧至當だ』とは、宮川君の洒落。しかし、それをいふ宮川君の服装は、僕のよりもお粗末だから笑止しい。学校から歸つて後も、亦此の話しで持ち切り。

○拘摸の奴飛んだ復讐をしたものなり。

○石投げに就いての落膽不可なり。一技一能に長ぜんと欲せば途中必ず失意あり得意あり。恰も遠路を旅するが如し。志すの初めに方つては元氣旺盛足亦輕しと雖も時に峻峻なる阪路に達ひ迂餘して上り曲折して下り疲勞困憊殆んど自失することなき能はず。克く耐え克く忍びて後始めて前途の光明を認むべきのみ。

○『混み合ひますから懷中物御用心』

十月十一日（金曜日）雨

終日不快。

昨日の電車事件を思ひ出して、終日不愉快云はん方なし。

○忘念術を研究すべし。

更に奮發

十二月十二日（土曜日）晴

今朝は、もう石投げは癡さうかと思つたれど、それでも、一奮發した。昨朝よりは較々好成績であつたので、馬鹿に愉快になり、思はず、三十分間程費して。

放課後、藤野君が突然尋ねて来て呉れたので、手を執つて坐敷に通し、色々話した。藤野君は、『家運の恢復を見る迄は、學校を退いて、神田の活版屋に備はれ、夜學中學に通ふ積りだ』と談つて、溜息をついた。僕は、藤野君の心情を思ひ遣つて、思はず泣いた。

藤野君が歸つて往つた後、僕は、父に向つて、藤野君を救ふ道を相談した。父は、『猶熟く考へて見やう。しかし、學校に行くだけが學問では無い。藤野君の心がけさへよくば、却つて、今の境遇が、學校に行くより以上の學問になるかも知れぬ。先づ、當分は、其の儘にして置いて、様子を

當分其の儘。

藤野君の心情。

十月十二日

三六五

十月十三日

三六六

見るがよからう』といはれた。僕は、多少不服ではあつたけれども、父の言葉であるから、止むを得なかつた。

○友情拘すべし。

十月十三日（日曜日）晴

午前九時起床。冷水浴、深呼吸二分間、體操など、常の通りにして、後、石投げをも練習した。成績は、昨日と同じ位であつた。

朝の間は、前週間分の總復習をして、午前十時に、漸く了つた。

藤野君の一家は、例の不幸以來、小石川の竹早町に移轉せられた。

午前十時。水菓子を一籠土産に持つて、藤野君の宅を訪問した。藤

野君は、神田に往つて不在。母君が出て來られ、僕の顔を見るや否や、只泣いてゐられた。僕も、何と挨拶して可いか判らず、『又伺ひますから……』。何うか、藤野君に宜しく』と言ひ置いて、直に辭して出た。富んだ人

藤野君を
小石川に
訪ふ。

例の動物園

が、一朝にして落魄した時程悲惨なものはないと思ふ。

晝食の後、竹坊を連れて、上野に行き、例により、動物園を見て來た。

妹が活けた梅、モドキが、大變美しく、床に飾られた。

夜、澤田君が遊びに來たので、英會話の練習をした。

八時半、澤田君が去り、九時五分前に寝た。

○日曜日限り冷水浴、深呼吸二分間、體操などを實行するにや。

○日曜日は多少閑なれば、此れ等の記事をも入るゝなり。實行は毎日してゐるに相違、これなく候事。（著者）

十月十四日（月曜日）曇夜雨

慰問使。

學校で、藤野君の噂をしたれば、柴田君は、『金持ちだと思つて、馬鹿に威張つてた野郎』と冷罵した。宮川君は、『級を代表した慰問使を出さうではないか』と言ひ出した。柴田君は、嫌な顔をしたけれども、賛成者が多

十月十四日

三六七

十月十五日

三六八

いので、添田君と山本君とが行くことになった。

五時間目の歴史の時に、福田判事殿が吉岡といふ馴軽者と悪巫山戯をして、紙團子を投げたのが、間違つて、野田先生の顔に中り、其の小言で終に三十分を形無しにして丁つた。教室を出たとき、一同で二人を撲り付けてやつた。吉岡は泣き出したが、福田は泣かぬ。「御免なさい。もう致しません。アイタ、ハ、ハ、ハ、御免なさい。御免なさい。オヤ入らつしやい。ハイどなた」など、茶化して逃げ出して丁つた。眞實に始末に行けぬ代物だ。

放課後、柔道に廻る途中、依田橋の上で、遠山の叔母さんに逢つた。夜、十五少年を讀んだ。

○所謂臨田判事殿亦一種の活動家なり。

十月十五日（火曜日）雨

爲な
不快
のため

金木犀。

襦袢。

雨天は實に閉口だ。薄寒いので、冷水浴をしても、深呼吸をしても、更に愉快を感じない。雨天の日の冷水浴や深呼吸は、愉快を得る爲めにするのではなくして、爲ないのが不快なのである。

便處の側にある金木犀が、いふにいはいはれぬ芳しい香氣を放つてゐる。雨降りには、特に香氣が高いものだ。

僕の服は、臂と臀部が抜けて、ズボンの裾が切れて、粗野で見つともないから、新調したらばと、母上の意見。妹は大賛成。「眞實に、兄さんは、田舎者全然よ」といふ。「襦袢を着て耻ぢぬのが君子です」と笑へば、「でもあんまり甚い。それでは、親の顔に係るぢやありませんか。」と、妹が生意氣をいふ。

○「只爲ないのが不快なのである」の一言習慣性を説明して餘りあり。眞習慣は第二の眞天性にして即ち徳性なり。

十月十五日

三六九

十月十六日

三七〇

十月十六日（水曜日）晴

又して
姉の奇聞

今日も、妹は、奇怪なことを言つてゐた。「兄さん。私の學校ではね、お友達（みな）が皆さう言つててよ。「兄さんの無いものは、二十世紀の女學生にはなれない」ッて。今日も、米山さんがね。「森さんには、兄さんが幾人あつて（？）と聞きましたから、「一人」と言つたら、「左様？」。何時から（？）ッて問ひ返しますから、「何時からつて始めから」といつたればね、嫌な森さん。慌（わづ）けてさあ。冗談ぢやありませんよ」といひますから、「妾（わたし）何時（いつ）戲談（ごうだん）を言つて（？）といへば、罪が無いわねえ。教へて上げませうか。兄さんといふのは、「ラヴァー」のことよ。貴嬢（あなた）「ラヴァー」ならあるでせう。幾人（？）と言つて、私の肩（かた）を叩くのです。兄さん。「ラヴァー」つて何（なに）？」と、息もつかないでよく百舌（しやべ）る。

女子教育
亡國論

僕は、浸々（しんぜん）と考へた。「女の口から、斯んな親不孝（おやぢうご）な音（ね）が出るとは、驚（おどろ）く

燈火（とうか）親む

の外（ほか）はない。誰（たれ）やらが、「女子教育亡國論（しよじきよいくわうこくろん）」を唱（な）へたのも、滿（まん）頁（げつ）無稽（むぎ）では無（な）い。

近來（こんらい）、夜（よ）が長（なが）くなつたのを感（かん）ずる。勉強（めいけん）には、最（もつ）も妙（めう）だ。今夜（こんや）は、十五（じふご）少年（せうねん）を七（しち）頁（げつ）讀（よ）み、猶（なほ）英語（えいご）の下（した）讀（よ）み一（いっ）週（しゅう）間（かん）分（ぶん）を了（り）つた。

○奇聞（きぶん）の記事（きじ）書いては如何（いかん）。

○隨（ずい）は之（これ）を掩（おほ）はんよりも之（これ）を曝（さら）して世（よ）に其（その）醜（みにく）い真相（しんじやう）を知らしめん哉（や）。（著者）

十月十七日（木曜日）晴

神嘗祭

今日は、神嘗祭（かみかひまつり）當日（とうじつ）で、學校（がっこう）は休業（休業）である。例（れい）の通り、午前（けん）五（ご）時に起（お）ち。

朝（あ）の勤（め）めをした。石（いし）投（な）げの手練（てのね）が段（だん）々（ぜん）進（しん）んで來（き）たのは、愉快（えき）である。朝（あ）の間（ま）は、英語（えいご）を勉強（めいけん）し、圖畫（ずゑ）の宿題（しゅくだい）を描（か）き、午後（ごご）は、學級會（がくきかい）の催（もよほ）して、日（ひ）比谷公園（ひびやこうえん）に往（ゆ）つて、野（や）球（きゅう）を演（あ）つた。

日比谷公園
に野球

十月十七日

三七一

その途中、電車が五六臺停滯して、彌次馬の群るのを巡査が制して居るのに出逢つた。僕は偶然、去る十日の出来事を思ひ出し、非常に不快感を起したので、見向きもせずに通つた。後で聞けば、今度のは、拘摸騒ぎでも何でも無く、金持ちらしい紳士と、汚い装をした土方風の男とが、無禮呼はりから喧嘩を始め、撲り合つたのであるさうな。金を溜めて、手柄顔をする高慢な奴と、貧乏の苦し紛れに世間を呪つてかゝる拗ね者とは、常によく衝突するものである。今朝のも其の一種であらう。喧嘩も、或る場合には必要だが、僕は群集の中で演るのは、卑怯者だと思ふ。腕力に訴へても自分の名譽を維持しやうと思ふなら、人の見ない場處を撰んで、命にかけて演るがよい。輕々しく争つて、社會の安寧秩序を破るのは、不徳義だ。

○金を溜めて手柄顔をする高慢な奴とは罵り得て痛快。金を溜むるは可なり。されども以て手柄顔をなすは卑し、殊に公益の爲めに之れを

散するの道を講せざる者の如きは罵るの價值もなきものなり。

十月十八日（金曜日）晴

米國の廻航艦隊が横濱に寄港したので、當市中も亦、國旗、慢慕提灯などの裝飾で目も覺めるばかり。新橋はいふに及ばず、到る處に歡迎門が出来、要處々々に造り人形が飾られ、近來の賑である。

學校で、作文の時間に、『米國廻航艦隊を歡迎す』といふ題を出された。最優三點だけ英譯して、同艦隊司令長官に贈呈するのだといふことで、何れも、一生懸命になつて綴つた。僕は極めて簡勁にと思つて、四段に切り。

第一段には、我國と米國との地理的、歴史的關係の密接なるを序し。第二段には、近來彼我の感情の動もすれば相衝突せんとする傾向を現し來つたのは、開闢二千六百年來の光輝ある歴史を有する世界無比

十月十八日

三七三

十月十八日

三七四

我儘主義の本家本元

の君主國と僅々二百歳に満たぬ新開地たる民主國、忠孝を基とした家族本位國家、本位の抑制主義の國風と、肉慾を基とした個人本位、夫婦本位の我儘主義の國風とが、餘りに相懸隔してゐて、總ての思想感情が何時も、兩極端に偏して、互に相容れぬ故であると述べ、殊に、我大日本帝國と合衆國とは、地球の正反對に位し、兩國民足跡相踏んでゐるのは、何等かの因縁があるわけではなからうかと、擲論一番し。

麥酒や藝者

第三段には、折角力癩を入れて遙々廻航せられた優勢な艦隊を迎ふるに、砲彈、水雷等の御馳走を以てせずして、麥酒や藝者を以てするのは、貴下等の衷心慄らす思召される處であらう。しかし、我武士道は、仁義の爲にする時の外は、劍を抜くことを許さない。此の儀は、特に諒して貰ひたいと切り込み。

第四段に至つて、此の度の御寄港によつて、君子國の態度を了解して貰ふ好機を得たことを感謝する。前途猶程遠し、幸ひに自愛せられよ。

と結んだ。

そいつはいかん

小出先生の指名に應じて、僕が之を高聲に朗讀したところ、教室も割れる許り大喝采であつた。先生は、澁い顔をして「そいつはいかん」と只言はれた。

結局、山本君、風間君、宮川君の三者を擇ばれたのは、至極穩當である様に思つた。

彼れ等の好きな腕車と昨日

今日は、歓迎騒ぎで、柔道は臨時休業であつた。歸りに、米國水兵が、三々五々、珍らしさうに、腕車に乗つて、麥酒會社から贈與した繪日傘を懸して、「パンチャイ」を連呼してゐるのを見た。

○突飛な歓迎文眞に「そいつはいかん」なり。

十月十九日（土曜日）晴

歓迎騒ぎ

今日も歓迎騒ぎで、市中は、上を下へと、全然轉覆。

十月十九日

三七五

十月二十日

Kuruma や日傘の行列、如何に奇観なりしや。

三十一

十月二十日 (日曜日) 晴

不出來

前五時起牒。冷水浴・深呼吸・二分間體操・石投げの練習等、常の通り。石投げに就いて斯う感じた。「技には誰でも熟し得るものだ。しかし如何程熟した技倆を備へてゐる者でも、虚心平氣無我無慾にならなくては其の技倆が效を奏さない。手の出來不出來を憂ふるよりも、心にならぬの無いやうに注意せねばならぬ」と。

朝の間は、例に依つて、前週分の總復習をした。

午後。宮川君に誘はれて、上野に行き、文部省開設の繪畫展覽會を見た。別館の西洋畫を見て廻つてゐる時、珍らしく、安田君に邂逅し、色々説明して貰つた。

安田君に別れ、宮川君と打ち連れて、此處を出たのが午後三時半。米

繪畫展覽會

通辯の
手傳ひ

馬鹿者の
行く處

宮川君の
家で
夕飯

國水兵が、相變らず、盛んに遊覽してゐる。宮川君の思ひ付きで、通辯に忙しさうな一大學生に頼んで、三人の水兵を分けて貰ひ、午後六時半迄に新橋に送り附ける約束で、淺草を案内した。三人共、無教育者らしい若者で、其の言葉も、例の米國式の、ペランメー的であつて、通じぬ個處が度々あつた。花屋敷・水族館・玉乗りなど、忙しく見せて歩けば、一人の男が「I want to see Yoshihara.」と、徐々例の獸的を出しかけたから、「馬鹿者の行く處だ」と、大喝して、電車で、新橋に送り附けて遣つた。お蔭で英語の實習が出来た。

時計を見れば午後七時。宮川君が、是非夕飯を食べて行けといふので、立ち寄つて御馳走になつた。

八時半頃歸宅。

○ "Thank you, 'Thousand lines'" と感懐して握手せしや否や。

十月二十日

三十七

十月二十一日 十月二十二日

三七八

十月二十一日 (月曜日) 晴

明日米艦
を檢閲す
る答

澤田山本長野の三君と明日米國軍艦の見物を約した。
午後五時。近田の兄さんを訪ひ、紹介狀を貰つて來た。あゝ、明日が
待たれる。

○大きな目をして見て來れ。

十月二十二日 (火曜日) 雨後晴

米艦往
訪

米艦隊歓迎の意を表する爲め、學校は臨時休業。幸ひであるから、軍
艦を觀に行かうと、午前六時半に宅を出た。同行者は、澤田山本長野の
三君と合せて四人。新橋で待ち合はせ、午前七時半の臨時で、横濱に向
つた。

午前八時半。萬國橋を指して、雨の中を急いだ。市中の裝飾は、降る

紅の傘。

ランナに
便乗。

「アメリカにマフ濡れの有様。歓迎門の米國旗からは、血涙のやうな紅
の傘が滴つてゐる。僕は、豫め、近田の兄さんから、吾妻艦乗組みの候補
生國川君といふ兄さんの友人に宛てた紹介狀を貰つて置いたので、あ
つと記號のある、吾妻艦の「ランナ」に便乗を許されて、卓頭を離れた。雨
は猶盛んに降つてゐる。波も随分激しい。港外には、ミネソタ號を始
めとして、内外の商船が、十七八艘も錠を卸してゐる。『もう、ミネソタが
見えるのか』と、長野君が、惶て、外を見る。『軍艦の方ではない。商船の
ミネソタだ』と、澤田君が説明する。『商船にも、ミネソタといふのがあ
るのか』と、山本君が聞く。同乗の海軍大尉が、獨微笑して、四人の顔を見較
べる。『ランナが、足掻きを速めて進むこと十四五分で、もう、本艦が見え
出した』と、澤田君が叫ぶ。見れば、直ぐ鼻のさきに、旗艦のコンネクナカ
ット號が、少將旗を翻へして、巍然として、山のやうに聳えてゐる。其の
次ぎにも、一萬二三千から四五千噸の鐵艦が、海を壓して、堂々と列を正

十月二十二日

三七九

吾妻艦の舷側に横着け。

して居并ぶ。「あれがオハイオだ」「あれがケンタッキーだ」「ロードアンランドだ」。「カンザスだ」と指呼する内に、ランチは吾妻艦の舷側に横着けとなつた。見れば、灰色に塗つた日本の艦隊は、米艦と相對して、三笠艦を先頭に、ズラリと二列に并んでゐる。其の威勢の好いこと、何とも譬へやうが無い。「立派だねえ」とは、四人が異口同音に漏した嘆聲であつた。

候補生室。

梯子を登つて、番兵に取り次ぎを頼み、案内されて、下甲板の候補生室に這入つた。國川氏に逢うて、初對面の挨拶を述べ、例の紹介状を渡せば、「好くお出かけでした。今日は、閑だから、緩くり遊びませう」と言つて、菓子や珈琲を出して、饗應せられ、色々珍らしい話を聞かして貰つた。

國川氏は、海圖や、軍艦の解剖圖や、其の外、色々な参考物を出して、軍艦の種類、構造などから、今度の米艦隊の組織、航路などを、詳かに説明し、續いて、今回の、南海に於ける海軍大演習のことを談たられた。軍艦の中

最新式米艦の舷上。

に坐して、軍艦に關する説明を聞くのであるから、大變に興味が深く、一同、熱心に傾聴した。何の話も、皆耳新らしい。中にも、今回來航の米艦中の、最新式だと誇つてゐる、ケンタッキーやケーサーの批評であつた。「……だから、實驗を経ない、机の上の考按は晝餅です」と附加せられた一語は、總べての事物上に應用され得る名言である、殊更強く感銘した。

やがて、一同、導かれて、氣持ちよく掃除され、整頓された、光輝ある艦内を巡覽した。此の艦は、噸數が九千七百で、装甲の一等巡洋艦である。甲板は、ポルトデッキから、上中下の三甲板、以下の四甲板を算入すれば、全部では、八階に仕切つてゐる。艦首と艦尾とは、例の十二インチ砲が二門宛并び、左右舷側には、八インチが六門宛、それに、速射砲機關砲などが、澤山備へ附けてゐる。何れも、手入れが十二分に行き届き、寸毫の油断がない。許されて、ブリツヂに上り、並みゐる艦名の指教をう

探として日光を反射す。

貧乏色。

金持過ぎたるは弱くなる。

水雷艇に便乗して米艦に至る。

けた。前後左右艦で掩はれて居る。此の時、一天拭ふが如くに晴れ互つて、真白く塗り廻された米艦が、燦として日光を反射する有様は、實に麗はしく氣高い光景であつた。山本君が「日本のも、何故あの通り白く塗らないのですか?」と問へば、「白く塗つては汚れ易い。汚れる毎に塗りねばならぬ。塗るには、少なからぬ費用がかかる。だから、貧乏色に塗つてあるのです」と國川君は、笑ひ乍ら答へられた。「それでは、あの真白なのは、金持色ですね」と、澤田君がいふ。言葉につれて、國川君は「今に、米艦に案内するから、實際について、其の贅澤さ加減を見給へ」と言つて、大笑された。「日本も、早く金持にしたいものです」と、僕が言へば、「左様。しかし、餘り金持になりすぎたら、弱くなりすぎから、貧乏でない位にして置て下さい」と、擲された。實際、左様かも知れぬ。

「水雷艇が出ますよ」と、水夫が報じてきた。「さあこれから、ルイロヤナ號を訪問させよう」と、國川君は、促される。「ルイロヤナ」は、第二小隊の旗

生水の御馳走。

艦で、一萬六千噸の戦闘艦である。五人は直に水雷艇に便乗して、それに着いた。五分間程待たされて後、一人の若い伍長に案内されて、艦内を巡覽した。随分大きい。縦が六十間、幅が十間、橋が二本、煙突が三本、探照燈が七座、舷側砲が右左各九門、宛構造は、格別新しいとは思はぬけれども、麵包粉を捏ねることから、皿を洗ふこと迄、すべて電氣装置になつて居るのを見ても、其の贅澤さ加減がわかる。僕等が見た時なども、麵包を澤山焼いてゐて、一片宛撮んで呉れたから、喰つて見ると、「カステイラ」のやうであつた。下甲板で、案内者が、特に念を入れて、これが水を呑む所だと説明し、「Will you take a cup?」と言ふから、「No, I thank you.」といふても、「Never mind.」と言つて、無理に一杯やれと云ふ。「水を強ひられたのは、生れて始めてだ」と笑へば、「陸上に生活して居るものには、水の有り難たさが判りませぬね」と、國川君が言はれたので、始めて、案内者の好意を了解した。「機械室を見せて呉れい」と請ふたけれども、迷惑そう

にして、到頭斷つて了つた。

狎ころが二疋飼つてある。毛色の美しい、可愛らしい奴であつた。導かれて、娯樂室に行けば、茲には、大小二十個程の金や銀の優勝盃が飾つてある。「これは、「ポートルレース」で得たもので、中にも、目立つて大きい一個は、純金製で、価格が二十萬磅。これは、英國の海軍の撰手と争つた時に贏ち得たものだ」と誇つて居た。國川君に聞けば、この艦が、米艦中の、「ポートル」の撰手であるそうなる。明後日は、日本方の撰手の吾妻と競争するといふことだが、「見苦しい敗を取りたくないものだ」と、眞面目に言つてゐられた。

十一時三十分頃。巡覽を了り、再び舊の上甲板に戻つて來た。艇がまだ來ないため、二十分間程立談をした。案内者に「Obliged」を述べ、握手した。「上陸し給へ。今度は、僕等が親切なる案内に酬ゆる番です」と言へば、「多謝々々。しかし、僕等は、一日限り(拇指を示し)上陸をゆるされ

二十萬磅の純金杯

樽一本

出して涙ぐむ。

吾妻に歸る。

便所に往つて、手を洗はぬ。

洋食の御馳走。

てゐるだけだ、而して昨日濟んだのを遺憾に思ふ」と言つて、涙を浮べた。よくよく、何物にか感動したものと見える。

水雷艇に選ばれて、再び吾妻に歸つたのが、正午であつた。艦毎に、號鐘が鳴り響く。

「便所は此所」と、中甲板の一隅を指されたので、吾れもよくと這入る。「手洗場は」と、長野君が問へば、「そんな贅澤な水はありません」といはれて、成程と氣附いたけれども、習慣は妙なもので、至つて氣持ちが悪い。

候補生室に戻れば、すつかり、晝食の準備が出来てゐて、「スープ」「ピッチャキ」「カッレツ」「ハム」など、順次に運ばれ、焼き「パン」に副へて、舌鼓打ちつゝ、食り食ふた。「料理が、ステキに上等で、其の上、腹が空いてゐるので、其の美味いこと、亦、カッレツだ」など、駄洒落れ乍ら、珈琲を啜り、又、色々海軍に關する説明を聞いた。中にも、澤田君は、海軍志望なので、受験の準備から、在學中の生活状態、遠洋航海の模様など、それからそれと五月蠅く聞いた。

早く來玉へ。

國川君は、一々親切に擲筆に説き示し、『海軍は骨が折れる更りに愉快です。早く來玉へ。待つてゐるから』と、快活に話された。

『何時までもお邪魔をしては濟まぬから、もう出かけやうか』と僕が言へば、『何、まだ可いでせう。折角來られた甲斐もなかつたでせうが、今夜は、イルミネーションがあるから、せめては、それでも見て行き給へ。随分壯觀ですよ』といはれた。『何ういたしまして、もう澤山です。一時に愉快を貪り過した位です。今夜は、屹度、寢言で笑はれる事でせう』と、強ひて別れを告げ、『ランチ』にばら／＼と乗り移つた。同乗の一少佐が、『三笠によせてくれ』と水夫に命ずる。『三笠に行らつしやいますか』と僕が云ふ。少佐は、悟りが早い。『さうです。君達、三笠を御覽になりませんか』と問はれた。『不幸にして、まだ拜見しません。一寸でも乗つて見たくて仕方がないのですけれども……』と、多少強請氣味に答へる。『よろしう。一緒にお出でなさい。明日は夜會があるので、多少混雜して』

三笠に

はゐるでせうが……』と、それでは、どうか……』などと、二三會話を交換する間に、早やもう、『ランチ』は、此の名譽ある旗艦に着く。これが、海底から引揚げられたものとは受けとれぬ程、新らしく、且つ立派なものだ。成る程、後甲板では、水兵が、右往左往に立ち働いて、常緑樹の枝菊花などで、裝飾の眞最中。

少佐はそこにゐる年若い士官を應いて、『誰かに、艦内を案内させて、次の便船で、棧橋に送り届けて下さい』と、僕等を頼んで置いて、一寸目禮して、船房に降りて行かれた。

僕等は、非番の番兵に案内されて、クル／＼／＼、艦内を急ぎ足に駆け廻る。鐵の梯を上つたり下つたり、護謨の扉を出たり這入つたり、艦底にゐるかとおもへば、『アツパードッキ』に現はれる、浴室を出るかと思へば、砲塔に這入る。かくて、最後に、導かれて司令塔に這入つた時は、一種言ふ可からざる崇高の感に打たれた。彼の對島水道の大海戰

司令塔に
残る眼

十月二十三日

三八八

の時、東洋の大ネルソンと歐米人に噴賞された、フェネラル、トローゴー閣下が、茲に立つて、『皇國の興敗此の一戦にあり。各員努力せよ』と、天より降つた神の聲の如く、凜として侵す可からざる最後の訓辭を發せられた時の英姿が、勞瘁として認めらる。鋼鐵の掩蓋には敵の砲彈に打ち抜かれた、舉大の跟跡が此の記憶す可き歴史の紀念として、其のまゝ保存されてゐるのを見るも嬉しい。

時刻が過るので、僕等は案内の水夫に促されて、再び「ランナ」に便乗し、假棧橋から上陸した。湧き返る様な雑沓の中を潜つて、市内を一巡し、汽車にのつたが、午後五時十五分。

神奈川鶴見の間を過る時、左には暮れゆく富士が、茜色に染め出され、夕暮れの蒼空を背景に、スックと姿勢よく立ち現らはれ、龍のやうな浮き雲をもてあそんでゐるのを賞し、右には、四十艘の大艦隊滿艦に點せられた電燈裝飾の光に浴しつゝ、汽車は、新橋をさして走りに走る。

富士の立

交換

大森で、酔つた米國水兵を滿載した臨時汽車と行き交ひ、汽車と汽車とは、互に、『萬歳』を交換した。

宅に歸つたのが午後六時半。

○級野。

十月二十三日（水曜日）曇

級野。

昨日、九段の境内で、僕の級の阪本君と、星董中學校の四年級襟野高志といふ男と、衝突した。襟野が、阪本君の服裝を冷罵したのに始まつたのである。阪本君は、始めは黙つてゐたけれども、五月蠅く仲間と談り合つては、『あれは君、中學生ぢや無い、立ン坊だよ。油断をしたら強請られるよ』など、冷評したので、阪本君が、到頭堪忍袋を破裂させたのだといふこと。誰にいはせても、襟野が悪い。僕の級は、直に臨時學級會を開いて、級の名義で、襟野に謝罪狀を要求して置いた。

級野提

十月二十三日

三八九

十月二十四日

放課後、柔道に廻る。

○堪忍袋の口紐は強靱なるべし。

夜、昨日の日誌を綴つたが、終らなかつた。

十月二十四日（木曜日）晴

三日を費
したる一
日の分は

今朝、一昨日の日誌の續きを誌し了り、猶、其の概要を書いて、藤野君に通信し、「寸暇があつたら遊びに来玉へ」と書き添へて置いた。

高田君に
對する不
平。

學校で、襟野の謝罪狀を待つてゐたけれども、何の音沙汰もなかつた。「明日迄待つて、返事が無いならば、級長に頼んで、談判に出かけて貰うては無いか」と僕がいへば、「そんな暇潰しは御免だ」と、柴田君が言つた。僕は、尠ならず不平であつた。澤田君、山本君なども、大に激昂した。言ひ争はうとしたから、僕はこれを制した。しかし、これを放擲して置いては、級の威信を傷け、延いては、學校の面目を墜すのみならず、僕等の極

形勢不
穩。

力主唱する變、カラ道の發展の阻碍ともなることであるから、高田君が反對ならば、添田君に迫つて遣る積りだ。「幾ら暇潰しだと言つても、級の輿論を重んじぬものは、級長の資格は無い。級長不信任の決議をして、改選を行ふが宜い」と、宮川君は大に憤慨した。柴田君は、形勢の不穩を見て取つたので、終に、前言を取り消し、漸く落着。柴田君の態度は、何時も、輕卒である。

夜幾何の宿題を解き、漢文の下讀みを終り、十五少年を讀んだ。

○青年者の輿論は斯の如く直に極端に走る。且其の間附和あり雷同あり。深く自ら警めざるべからず。

十月二十五日（金曜日）晴

今朝何處かの飼鳩が庭に降りた。竹坊が喜んで、煮豆に使う黒豆を母に貰つて、頻りに撒いて遣る。僕が、廢せば好いに、例の石投げ練習に

磯一發家
中。

十月二十五日

十月二十五日

三九二

用ひる小石を取つて、何氣なく投げ付けた。ハッと思ふ刹那、一羽の鳩の頭部に命中。バタ／＼と羽叩きして、コロツと其處に倒れて了つた。他の鳩は、一時に、バツと飛び去る。竹坊は大喜び。洗足で庭に降りて、それを拾ひ上げ、『鳩が取れたよ』と大聲に嘸鳴る。物音を聞き付けて、妹が飛んで来る。『兄さん？』まわ。不惑さうな……』と叫ぶ。父も出て来られて、『何處の鳩だ。判らない？』飼ひ主を尋ねて、謝罪れ。怪しからんことをする。』と、大變な御不興。僕は、喜び且つ悔んだ。小石一發で鳩を斃した、僕の手練は嬉しい。しかし、他人の飼ひ鳩を、故なく、殺した罪は恐しいのである。『是れが例の鼠であつたなら、僕は、思ふ様、其の功に誇つて遣るものを……』など、思ひ續けた。

御不興。

學校に往つて、此の事を話したけれども、心當りが無いらしい。昨日の襟野詰問問題、今日も喧しい。待つてゐた謝罪狀は、今日も来ない。今日は、柴田添田の兩君と阪本君と、三人で談判に行くことにした。

大變な父の不興。

た。

五年級の同僚。

五年級の阪田富士川二君も、此の事を聞いて、大に憤慨した。『大に遣り玉へ。何處迄も後援になつて遣る。星董中學校の奴は、前から、生意氣で、ハイカラで、墮落生が多くて、仕方が無いのだ。此の際、思ふ様齋を取つてやるが好い』と言つた。

柔道に廻り、五時半歸宅。

藤野君から返書が来た。『……………大變面白く讀んだ。只、從來の如く、んば、君等と共に、三笠艦の甲板上を濶歩して、大に元氣を鼓舞することが出来たらうと、女々しい感慨も起つて……………』と書き添へてあつたのを讀んだ時には、僕も、思はず、吐息をついた。今日は、その米艦隊が、横濱を出發した等。

○友情探すべし。

女々しい起つて。

十月二十五日

三九三

十月二十六日

三九四

十月二十六日（土曜日）晴

山茶花咲く。

庭の山茶花が咲き初めた。秋咲く花は、總べて氣品が高く、何れをそれと優劣は定め難いが、僕は、何故とも知らず、此の花を特に愛する。父もさうと見えて、從來、赤が三株、白が二株であつたが、去年、白の方を、又二株植ゑられた。それが何れも、威張よく生ひ茂つて、吾が庭の秋を新に飾つてゐるのは嬉しい。

首級を得て降る。

今日は、柴田君等三人から、襟野に對する談判の報告があつた。要求通り、謝罪狀を得て歸つたのは、上出来であつた。例の彌次馬連は、多少、柏子抜けの氣味。『もう少しは、手應へがあるかと思つてゐた。案外弱虫だねえ』と言つたものがあるので、級長は、大に不平であつた。僕は、直に『そんなに弱虫ぢやないさ。此方が強かつただけだ。』と言つて、三人に花を持たせた。しかし、此の言葉は、案外功驗が現はれなかつた。福

福田君は

碌々斗香の人。

田君は『こんなことなら、談判など廢して、直に宣戰を布告した方が面白おしたな』と、非文明的なことを遠慮なく言ふ。碌々人に籍つて事を爲す連中の無責任は、何時も斯うだと思ふと、情なくなる。

○文明と、ハイカラと、野虫との關係を研究せば面白からん。

十月二十七日（日曜日）晴

意地悪婆さん、桑原さん。

午前五時起床。冷水浴、深呼吸、二分間盤操など、常の通り。石投げが逐次上達して來て、今朝は、三間口で、吊り毬を打つのに、三十發で二發外れただけであつた。但し、その外れた石の一つは、法外な外れ方をして、隣りの板塀にひどく中り、今少しで、意地悪の婆さんに、睨み殺されるか、嗚鳴り潰される所であつた。桑原々々。庭の掃除をして、后、食事を済ませ、前週分の總復習をする爲め、十時半迄、身動きもしなかつた。

十月二十七日

三九五

十月二十七日

三九六

復習が済んで後、竹坊を連れて、湯島天神を散歩して来た。

午後二時。珍らしく、近田の姉さんが来られ、色々談しをした。姉さんは、近來、大變血色が好く、元氣も恢復した。「姉さん。どうか、男の児を産んで下さい。そして、名は、僕に付けさせて下さい」と言へば、母が引き取つて、「そんな無理な注文がありますか」と笑はれた。「男の兒であつたらば、何と名を命けて呉れますか」と姉さんも笑はれた。僕は、直ぐ、「時宗と命けます。僕は、武士道全盛時代の鎌倉風が一等好きです。だから、又、北條氏が好きで、北條氏の中では、時宗が一番気に入つてゐるからです。男は、時宗位の氣力が無くては、書餅だ」と言つた。

『それでは、時宗の肖像の、油繪の、寫眞の、コロタイプがあるから、何時でも上げてよ』と、姉さんが、思はず、昔しの女學生言葉を振り舞はす。「何だか大層入り組んだ繪なのねえ」と、母が高笑ひ。「豪う複雑おまつしやる」と、僕は、福田判事殿の口調を真似て、又々、一同を笑はせた。

男の兒を産んで下さい

男の兒を産んで下さい

男の兒を産んで下さい

宮川君に林檎五つ

藤野君に口野の幸公

午後三時。宮川君の宅に遊びに往き、姉さんから貰つた林檎を五つ、分けて贈つた。

夜、十五少年を読み、九時半に就寝。

○好きな理由が説明せられ得る間は、眞の好きはあらざるなり。

十月二十八日（月曜日）雨

今日は、父から、愉快な相談を受けた。それは、父が、「悪意な人から、法料大學の給仕が缺けたので、至急に備ひ入れたいから、世話をして貰ひたい」と頼まれたが、藤野君は何だらう」と話されたのである。此の口は、月給が十二圓で、それに、被服料があつて、寫し物と使ひ位ひで、閑職であるから、勉強が出来て、末の爲めにも好いだらう、といふこと。それで、資格は、高等小學校の優等卒業生位なら好いが、只、英語が多少出来ねばならぬといふので、藤野君には、最も適當と思ふ。直に、葉書で、藤野君に通じた。

十月二十八日

三九七

十月二十九日 十月三十日

三九八

○君の熱心父を助したるものなるべし。

十月二十九日（火曜日）曇

朝、藤野君が寄つて呉れたので、昨日のことを話した。藤野君は大變喜んで、父に相談をして、直に返事をするから……と言つて、勇んで去つた。

夕方、又、藤野君が来て、「僕で勤まりさうならば、何卒お世話を願ひます。父からも宜敷」との返事。僕の父は、直、紹介状を藤野君に渡した。

○藤野君知遇の情に泣きたるなるべし。

十月三十日（水曜日）少雨後晴

今日は、教育勅語を下し給つてより二十年日の、大記念日である。学校では、午前九時から、勅語捧讀式があつた。勅語の捧讀を終つて

教育勅語式

藤野君と

世の美

后、校長から、一場の訓辭があつた。

校長は「我道德の基礎は、國家本位である。家族本位である。随つて、忠と孝とである。歐米の各國に往々見るやうな、夫婦の愛を基礎として、個人の幸福を基礎としたりするものは、大に趣きを異にしてゐる」と説き起して、「……今日は、理屈よりも、活きた實例を擧げて、諸君と共に、聖意の存する處を味つて見たい」との前序を置き、今日の、萬朝報の三面に出てゐた、牛込矢來三番地の中川清吉といふ孝行兵士の事實を熱心に談られた。僕は、清吉君の家庭の貧しきを聞いて、先づ、藤野君を思ひ出し、撫然として嘆息した。次ぎに、清吉君の、徴兵に當籤して、麻布の第一聯隊に入營するに至つたこと、清吉君は、自分が出て行かば、老父幼弟、幼妹が如何に窮乏を感じるであらうと考へて、後髪を引かれる思ひのあつたこと、老父は、それを悟つて、腕を撫り、「大丈夫だ。安心しろ。國家のお爲には、何んなことでも辛抱する。例令へ一族が餓死しても、本

十月三十日

三九五

十月三十日

四〇〇

望では無いか』と叱り且つ勵ましたことを聞いては、執涙が迸つた。清吉君の入營后、老父は脚氣を患ひ、且つ盜難に逢ひ、牛込の家を見捨て、狭い某家の一室を借り受け、幼弟は神田錦町の活版屋の職工となつて、月々僅に五圓の賃金を得、それで自分と病父とを養ひ、幼妹は同じく神田の或る親戚に預けたと聞いて、不安の念に駆られた清吉は、第一期の檢閲を過ぎ、日曜の外出日に、歸省して、此の有様を目撃し、腸を斷つ思ひ、終に思ひ切つて、毎日曜日には、外出を待ちかねて、軍服を脱ぎ捨て、車を挽いて、其の賃金を貢ぎ、猶營内で剩し得た、食費や手當を、悉く父に仕送つたことを聞いた時には、滿場水を打つた如く、且つ、嘔吐の聲さへも聞え、仰ぎ見る者が一人も無かつた。殊に、それを傳聞して、調査した、上長官は、日曜日軍服を脱して斯かる勞役に服するといふ犯則の行爲を知り乍ら、同情の餘り、之を罰するに忍びず、剩へ感狀と賞金とを與へて、此の至孝を旌表した上、猶種々盡力の結果、病父を入院せしめて遣り、終に、清

吉に、特別の除隊を命じたと聞いた時には、僕は、且つ泣き、且つ喜んだ。何等の美談であらう。父といひ、子といひ、幼弟といひ、忠孝悌の道に違はず。殊に、上長官の仁義の、古武士に劣らぬ麗はしさを、君子國でなくては見られぬ、千古の美談ではなからうか。最後に、校長は、畏くも、勅語の聖旨を喃々するものは到る所に見られる。然れども、之れを實行し得る斯くの如きは、甚だしい。長嘆息の至りでは無いか』と結ばれた。之れを聞いて奮起しないものは、無感覺の徒、否、寧ろ國賊である。

捧讀式の後、柔道部、擊劍部の大會があつた。

午後四時歸宅。藤野君の父君が來られ、一時間餘談された。父は、藤野君の父君を大變褒めてゐた。

此の夜、又、十五少年を讀んだ。

○詩人、畫工、音樂家等は國家の爲め此の此の美談を讀み、描き且つ讀み、書きなげり。

十月三十日

四〇一

十月三十一日 (木曜日) 曇

今日は、寒暖計が華氏の五十一度に降下して、非常に寒い日であつた。長野君に、狗の兒を一疋貰つて來たが、續け様に泣いてゐるので、大閉口。明日は返す積りだ。

○想へ。吾子の母が吾子一人を飼育するは百千の狗兒を飼育するよりも困難なりしことを。

十一月一日 (金曜日) 晴夜雨

今朝、藤野君から葉書到着。「今日から、法律大學に出勤することゝなつた」といふことを報じ、篤く禮を述べてあつた。藤野君は、眞に彈力のある、頼もしい男だ。

嘗ては、犬と猿との仲であつた。大決戦の後、漸く媾和した。けれど

したる後
親友の
多し。

も、今は、最初から相和して居た他の朋友よりも、捨て難い思ひをするやうになつた。不思議なものだ。

學校に往く時、例の狗の兒を持つて、往つて、長野君に返した。長野君も「要らない」といふので、小使に遣つた。

川村君が、近來、又々遅刻をするやうになつたので、一同で、注意を促した。理由を聞けば、睡眠時間が不足するのでもなく、病氣でもなく、家事の手傳ひをするのでもなく、其の癖、通學距離が遠いのもない。只、朝、眠は覺めても、寒いから、何だか起きるのが嫌になつて、色々考へることなどしてゐる間に、もう遅くなつて了ふのだ」といふ。無精な男だ。「此の男は、兩親が早世して、祖母に育てられた爲めに、甘つたれてゐた結果だ」と、老成の風間君が説明してゐた。さうかも知れぬ。「何にしても、悪い癖だから、矯めて遣らう。明日から、遅刻したらば、思ふ様打ん撲つてやらうではないか」と僕がいへば、福田判事殿は「面白おすな。僕が引き受

祖。父。育

僕の出活
報り。

十一月二日

けとらして上げまつせ」といふ。

柴田君は、只黙つて、不平さうな顔をしてゐる。僕の出過ぎたのを不快に思ふのであらう。「斯んなことは、本來、君の責任ぢや無いか。確りして呉れなきや困るよ」と宮川君は、其の意を悟つた態と強く柴田君の脊を打つ。柴田君は、「失敬なッ」と嘸鳴つた。「何が失敬だ。好意で忠告したのぢや無いか」と宮川君が言ひ返す。「忠告するのに撲らいでも好え」と柴田君は尤める。添田君は、瘦せてはゐるが、流石に豪い。「小争論は止せ。見つともないから。」と、靜に一同を和めた。川村君が、何か言はうとしたれば、「君は出る幕ぢやない」と叱り付けたのは、上出来であつた。

○無精者を懲すべし。日本には充分無精者は要らぬなり。

十一月二日 (土曜日) 晴

庭球に放
れぬ。

狗の遺
る場。正
に遺り正
困り正

今日、放課後、テニス、マツチがあつた。僕は、何ういふものか、テニスには上達しない。何う慾目に見ても、第三流だ。

小使、ラング先生「終夜、狗の兒に鳴かれて、懲りくしました。何處かに捨てたが、可いのでせう」と言つた。棄てるのは不惑だ。連れて歸らうか。又泣かれては閉口する。誰彼遊説しても引受けやうといふ者が現れぬ。持て剩してゐると。すると、松山君が「鳴いても好いから……」と、提げて歸ることになつたので、漸と胸を撫で卸した。

○流石の壁カラ大將狗一疋を持ちあぐんだ處笑止々々。

十一月三日 (日曜日) 晴

朝から天長節日和。一點の雲も無い。妹は、一ヶ月も前から樂んだ。新調の紋付きを着けて、三十分も早く學校に出かけて行く。女といふものは何故斯んなに着物に大騒ぎをするだらう。

十一月三日

天長節日
和。

十一月三日

四〇六

愚圖々々して式に後れてはならぬと、僕も出掛ける。流石に、今日は雑巾のやうなズボンだけは、梢新しいのに取り換へた。靴も昨晚一二割方入念に磨いて置いたのを穿いた。母は、「男の兒は世話が無くて好い」と、僕の制服の後姿を見て、浸々いはれた。

門なみ、町なみ、國旗の林。轟き亘る祝砲の中を、金モール載せた馬車、腕車が駆け交ふも景氣が好い。

學校に往つて見れば、縮緬の大國旗がメラリと門柱に交叉されてゐる。運動場では、「テニス」野球、鐵棒、階段、何處も何處も滿員の有様。課業の無い日の朝の氣持ちは又格別である。と見れば、一團の彌次馬が一人の男を脰上げしてゐる。誰かと思へば、五年の村上。此の男、動もすれば媒に艶飾す癖があるので、「校風に副はぬ」と、蠶カラ團の批難を受けてゐる。今日も、多分、新調の羅紗服と佛蘭西革の護膜靴とで遣られたのであらう。

鈴が鳴つて講堂に這入れば、何時も見ると通りの純潔な裝飾、見るから氣持が好い。「小出先生の剝けて皺くちやの「フロックコート」が、野田先生の最新巴里型と共に目立つて好い對照だ」と、松山君が小聲にいふ。クスクスツと笑ひ聲もする。

君が代を唱へ、御影を拜し、勅語を拜聽して後、校長の訓辭。校長は、「天長節日和」といふ題で、地理的に天長節日和の理由を説明し、歐米諸國の天候の状態と比較して、日本晴れの世界に比類のないことを述べ、亞いで、日本の山水風土が天恵を恣にしてゐることを、多くの例證を擧げて説被し、「我皇國の山水風土が世界に比類の無いことは此の通りである。豈啻に萬世一系の皇統のみならんや」と結んで置いて、「此の世界に比類の無い皇室と及び山水風土とを與へられた吾人大和民族は、又世界に比類の無い大和魂を享け傳へて、之れを發展せしむる上に遺算ならんことを注意せねばならぬ。」と、熱誠を籠めて諭された。二時

十一月三日

四〇七

十一月四日

四〇八

間に亘る訓話乍ら満堂水を打つた如く鏡り切つて傾聴した。

宅に歸つたのが恰度十二時で、祝砲が又々般々と響き亘つて居る時。

午後。宮川君、澤田君、山本君等を誘ひ、父に連れられて、大隅伯郎の菊

花を觀た。壯觀々々。黄菊、白菊と昔から特に賞讃するが、成る程菊花

は、黄と白とに限ると思ふ。高尚で幽玄で、特に日本人の趣味に適して

ゐる。

午後五時。三君をも連れて歸り、母の自慢の御郷風の牡丹餅とかけ

汁との御馳走をした。

○天長節なる語を聞いただけで吾人は無上の快感を覺える。

十一月四日（月曜日）晴

狗君萬歳

松山君が「ラング」先生に貰つて歸つた狗兒は至極壯健。よく慣れて可憐いとか。

十一月五日（火曜日）晴

靖國神社秋季大祭

靖國神社の秋季大祭日で、九段は參詣人で充満。

放課後、竹坊と妹とを連れて參拜した。僕等が大華表の下を通つて

ゐる時、盛装した近田の兄さんが社内から出て來られるのに逢つた。

遊就館を案内して色々説明して貰ひ、別れて後、活動寫真を見て、六時歸

宅。

歸宅後、竹坊は、活動寫真で見た「惡戯」小僧が尻を叩かれたことばかり、

不完全な言葉で説明する。

十一月六日（水曜日）雨

竹坊の感興

流星光低す。空を迷

今日は勅使が靖國神社に御參向になるので、學校は珍しく休業。

朝、例の通り石投げの練習中、庭の袖牆に雀が二三羽遊んで居たから、

十一月五日 十一月六日

四〇九

十一月七日

四一〇

一發呉れて見たが中らぬ。墨水練は、案外無功なものだと、落胆する。食後、英語と代數とを自習し、妹に英語を見て遣り、十一時になつた。午後一時。父の使ひで三井銀行に行く。

午後二時半。遠山の實君久し振りに遊びに来る。遠山君は、「東華中學校は、蠶殼學校、董星中學校は、灰殼學校だ」といふから、「孰が好まか」と問へば、兩方嫌だといふ。世人はこれを穩健とでもいふのであらう。

二人が議論して居る時、宮川君が遊びに来たので、學校の評判が益々盛になつた。談は、やがて、武士道青年團に移り、活動主義に轉じ、三人共大氣煽。

例の座り相撲など演り、午後五時半、二人去る。

○此の一日を口の人に終れり。

十一月七日（水曜日）晴

中條を好む實君

氣煽

松山武士道青年團

松山市の中川君から長い封書到達。松山武士道青年團を組織したこと、賛成者が多いこと、本月一日に發會式を行つたことなどを報じ、規則書や、其の記事を載せた新聞紙迄、同時に郵送して呉れた。直に返書を認め、同會の將來を祝した。藁火的に畢らせたくないものだ。

○斯んな團體も特に出來ればならぬとは情なし。

十一月八日（金曜日）晴後曇

學校で、竹内先生が、藤野君の近況を聞き、僕の同君に對する友誼を褒め、頻りに油を灑がれた。先生の生徒に對する愛情には、今更ながら、感服する。

○堂書に竹内先生のみならんや。

十一月九日（土曜日）曇

十一月八日 十一月九日

四一一

竹内先生の愛情

佐藤君遠く來遊。

十一月十日

四二

午後零時十五分。學校から歸つて見れば、松戸の佐藤宗一君が來てゐた。學校の臨時休業を機として遊びに來たといふ。

共に晝食を濟ませ、連れ立つて上野に往つた。途中、夏以來の出來事など語り合ひ、文部省の繪畫展覽會を見、博物館の時代人形を褒めなどして、歸宅。

○朋あり遠方より來る亦樂しからずや。

十一月十日（日曜日）晴

突飛とは評したり

五時起褥。冷水浴、深呼吸、二分間體操の後、例の石投げを演つてゐる時、佐藤君は起きて來た。「君何を演つてるの？」と、不思議さうに聞く。「御覽の通り、石投げの練習」といへば、「そんなことを練習して何うする？」と又問ふ。「何うもしない。只練習するのだ」と答へたが、腑に落ちぬ様子。「相變らず、突飛なことをするね」といふ。成る程、石を投げるのだから、突飛には相違これなしだが、相變らずとは、酷な評だ。

妹を接待

人がッロ

淺草公園式趣味

遠來の珍客だから、今日は、臨時に日課を廢して、終日款待しやうと思つたけれども、それでは、不規律の基だと例に依り、前週中の總復習をした。其の間、妹に、接待係を命じた。妹は、氣を利かせて、九段の遊就館に案内し、それから、日比谷公園、二重橋外を廻つて、十一時過ぎに歸つて來た。「女學生の道案内は御免だ。人がッロ、見るので恐縮した」と、佐藤君も案外無遠慮なことをいふ。妹こそ好ひ迷惑だ。

午後一時。今度は僕が案内して淺草を見せた。「何時見ても、淺草は佳いねえ」と、佐藤君は、感心する。田舎者だけに趣味が低い。佐藤君は、土産だと謂つて、色々くだらぬものを買ふ。それでも、感心に、妹に、羽織の紐を買つて呉れた。

晩食後、佐藤君辭して出る。竹坊と妹とを連れて、上野停車場迄見送つた。

十一月十日

四三